

『勸進能舞台桜』注釈(四・終)

時代物浮世草子研究会

(木越 治・高島 要

・高橋明彦・村戸弥生

・木越秀子・穴倉玉日)

【凡例】

- 一 本稿は延享三年正月八文字屋刊行の浮世草子『勸進能舞台桜』(全五卷)の注釈である。今回は第四・五巻を扱う。本注釈は今回で終了する。
- 二 底本は長谷川強他編『八文字屋全集 第十八巻』(汲古書院、一九九七年刊)に拠った。詳細な書誌情報等はすべてこちらを参照されたい。
- 三 本注釈に掲げる校訂本文の作成方針は以下のとおりである。
 - 1 漢字は可能な限り現行の字体に直す。
 - 2 底本の句読点はすべて「。」で区切られているが、適宜「、」「。」「」を区別する。
 - 3 底本にない箇所でも、意味を取りやすいと思われる場合には、適宜「、」「。」「・」「濁点等を補う。
 - 4 人物の発言や心中思惟の部分には「」を付す。
 - 5 底本のルビはすべて生かすが、それ以外にもあった方が読みやすいと思われる箇所には適宜補う。

6 助詞の「共」、形式名詞の「事」等は原則として仮名に開く。

7 全体として、日本古典文学を学ぶ海外からの留学生が、本文を読むことに関して抵抗を感じないような本文づくりをめざした。

四 注釈は簡潔をむねとし、できるだけ近い時代・近いジャンルの用例を掲げるように努めた。

五 用例本文は通行の字体を基本とし、ルビは必要と思われるもののみ（ ）に入れて掲げた。

六 用例の出典表示は、「近松・宵庚申」「秋成・妾形氣」など作者名を掲げるもの、「咄本・喜美賀楽寿（安永六年刊）」のようにジャンルと刊年を示すものなど一定していないが、あえて統一することはしていない。

七 各章の冒頭に、梗概を掲げた。

八 礎稿作成者は以下の通りである。

四の一 高島 要

四の二 村戸弥生

四の三 高橋明彦

五の一 高橋明彦

五の二 木越秀子

五の三 木越秀子

勸進能舞台

四之巻

目録

【校訂本文】

邯鄲 狂言 釣狐

第一 四季折くは目前の色庵

お寺がたのかくし妻とは面白やふしぎやな
ひるかと思へば夜ばかりの通ひ所

第二 一むらさめもふりにくい大尽

千貨万貨は石かはらの露

きへたやしうと太夫の一言

第三 家老の策にかゝる後悔

茶ばかりで塩のない麩ざぶらひ

昆布に山柀の目の見へぬ欲心

◆邯鄲 謡曲。四番目物。現在能。作者未詳。シテは悟を開くために楚の国へおもむく途中の蜀の青年盧生。邯鄲の里に泊り、栗御飯が炊きあがる間に一眠りしたところ、榮華を極めた夢を見、人生を悟つて帰つてゆくというもの。『太平記』卷二十五「黄梁夢事」と同じ説話を骨格としている。巻四の一・二はこの謡曲が下敷になつてゐる。

◆釣狐 狂言。極重習物。別名「こんかい」。一族を次々と狐師に捕らえられた老狐がシテ。狐師の伯父の伯蔵主（はくぞうす）という僧に化けてその家を訪ね、狐釣りを思い留まらせようとするが、狐師は伯父のそぶりに不審を抱き、仕掛けをして捕えようとする。狐は一度は畏にかかるが巧みにそれを外して逃げ入るといふもの。巻四の三はこの狂言を下敷にしている。

◆四季折／＼は目前の 「四季折々は、目の前にて」〔邯鄲〕による。

◆色庵 妾宅。困いものを住まわせる家。

◆面白やふしぎやな 「面白や、不思議やな」〔邯鄲〕による。

◆かくし妻 人に知らせずこっそり困つておく妻。「さる禅僧、かくし妻をこしらへて、程なく子をもふけ」〔咄本・年忘嘶角力（安永五年刊）・二〕

◆ひるかと思へば 「昼かと思へば」〔邯鄲〕による。

◆一村雨 「ひと村雨の雨宿り」〔邯鄲〕による。

◆ふりにくい 「村雨が降る」に、相手を拒む意の「振る」をかけている。

◆千貨万貨 たくさんの宝物。「千貨万貨の御宝の、数を連らねて棒げ物」〔邯鄲〕による。「千顆万夥」とする本文も多いが、本注釈では、「千貨万貨」となつてゐる『謡曲百番』（岩波新古典大系本）による。

◆石かはらの露 石も瓦も役に立たないものたどえ。（宝物と思つたのは夢ですべては）露と消えた、ということ。

◆きへたや 前行の「露」を受けて、（左京大夫の言葉によつて、すべて自分の思い違いであることがわかつた友仲は）自分の振舞いを恥ずかしく思い、露となつて消えてしまいたい、と思つたこと。

◆後悔 後悔を「こんくわい」と読ませていることについては、四の三末尾の注を参照のこと。

◆茶 人を馬鹿にしたり、ふざけていること。「コレせんせい、そふ一がひにいゝなるな。岡ばしよも茶にならぬ」〔浄瑠璃・傾城買指南所〕

◆塩のない 愛想のない。四の三本文の注を参照のこと。

◆昆布に山柀 「別に馳走はおりない。昆布に山柀、よい茶を申そう」〔釣狐〕をふまえる。昆布と山柀から水辛という菓子を作つたことから、取り合わせのよいことにたとえられる。これに茶を合わせた三点は狂言「文蔵」や一休の『自戒集』にもみえる。「花に鶯、紅葉に鹿、こぶに山椒、恋に酒」〔近松・栴狩劍本地・四〕

○卷四之一

○四季折くは目の前の色庵

【梗概】

ここは、難波上塩町。家老たちの指図で難波に逃れてきた友仲は、彼らが頼れといった所には赴かず、ここ上塩町で内科医に姿を変え、須可滝養元と名乗っている。生まれつきの美男のおかげで、坊主の囲われ女や妾宅が立ち並ぶこの界限では評判がよく、その主人である坊主たちにも性病などの相談が気兼ねなくできる医者として繁昌していた。

この日も、診察に出かけようと丁稚に草履を出させていると、道頓堀池田庄三郎という茶屋から使いが来る。友仲の患者である下寺町のさる坊主が怪我をし、友仲でないと困るといふのであるが、その使いの顔を見ると、友仲の旧知の島原の料理人朝倉の三ぶであった。彼は、古一文字屋の浜萩という小天神となじみになり、いまは、島の内のさる大茶屋で夫婦で奉公しているのであった。彼は友仲に、馴染みであった吉野大夫の消息を伝える。彼女は、かくまわれていた三郎左衛門のもとをのがれ、友仲を探すために島の内に移って来ており、此花と名を変えて、自前で遊女勤めをしているが、いまは、京都の明神様と呼ばれている武士と大変な馴染みようであるという。そして、友仲が呼ばれたのは、この此花の美貌に見とれた坊主が階段を踏み外して怪我したからだといふのである。この話を聞いていったんは吉野の心変わり腹を立てた友仲であったが、傾城に誠がないのは当然のことと思ひ直して自分をなだめる。が、心は晴れない様子である。それを見て料理人の三ぶは、かつて友仲のお大尽遊びの恩恵にあずかったことを言い立て、我々夫婦が協力するから吉野（此花）に恥を掻かせてやりましょうとそそのかし、ともに島の内に向かつていった。

【校訂本文】

浮世の旅にまよひ来てく、夢路をいつとさだめん。

これは上塩町のかたはらに友といへる者なり。我大名に生れながら、政道をも心掛ず、只色事にあかしくらすばかりなりといふたは、今はむかし語り。家老どもが情にてあやうひ所をまぬかれ出で、この難波へは来たれども、紙子一重の取り付き。何面目あつて国元へあり所を知らせんやと、右近

三郎左が指図の心当へは落ちつかず、上塩町といふて、取りのき講の料理受け取つて、魚は喰れて成仏すると心得て居る。動落庵のみ立ちつゞき、奥深にしづかなる構は大方紫袈裟かけた旦那殿の、かこふて置かるゝ珠数先のお房、陀羅尼のおかぢ、称名声のお吟、大黒の槌に生れたればとて、おなべといふも丸ぶたの坊主亭主、名題座敷ばかりにて、その間くの小借屋は、わらざうり・火ふき竹・さくら・ふのり、一文菓子のかたわきに、なにの事かは知らぬが「是あり」との看板多く、寺の隠居がたの多ひ所には似合はず。豆腐屋は稀にして魚屋がちなる軒つゞきに、友仲は誠に木からおちた猿舞、へへんのかみと相借屋、何喰まいと継母ゆへ流浪いたす、西国の町人のむすこと披露し、名も須可滝養元とあらため、本道の医者ぶ。何が契情買の骨長、一もみぎつともまれたる、はりま紙子の肌あたりよき人つきあい。第一慾気のない人間、今の世界にはまれものと驚熊鷹の様な、爪仲間の商人どもいとしがりて、無理やりに医者に仕立て、寸白に敗毒散もられても飲む気になりての取りもち、生れ付きたる美男、咳にはとろりと撫てもらひたがる、髪めつらしき近所のかこはれもの、心をうかさぬはなきゆへ、お妙やお仏の取り持ちにて歴々の寺方へ立ち入り、外の医者どちがい引き合せ人がよきとて、大和尚大上人も色衣まくつて、旦那衆へ沙汰のならぬ怪我をも見せられ、常体の医者なれば、「所化の時分学寮でいかう湿にあたりました故」との長口上いらす、打付に山婦来の相談、遠慮内証の礼物夥しくとれて、そろくぬき紬の綿入羽織も加賀絹のまだ己の刻ばかりなるに着かへ、薬箱包も染分の木綿が紫の日野にかはり、やがて療治にいでんと、この中かへたる角前でつちに草履なをさする所へ、「頼みませふ。道頓堀池田屋庄三郎と申す茶屋から参りました御ざります。こなたの御療治先、下寺町のさるお寺様、私方にてちと怪我をあそばし、外の医者衆はいやじやほどに、上塩町へゆきて、須可滝養元様をよんで来てくれよとの仰せで、お迎ひにまいりました」といふを聞いて、

「自体、老僧の身で責念仏が過ぎる」

と、怪我といふよりはやのみこみして、

「その使、これへ通し申せ」。

「かしこまりました」

と入つて、

「ヤア、これは思ひもよらぬ。お前様は、友大尽様では御座りませぬか。」

「これはしたり。京の嶋原で名高い、料理人朝倉の三ふではないか」

とあれば、

「されば、私ことは、旦那もつはらお里通ひの比より、古一文字屋の浜荻といふ小天神になじみ、ちとわけのたゞぬ事ありて、浜荻を連れ、御当地へくだりしかども、新町は京の引はりでつとめにくき身と成り、只今は嶋の内で肩きる大茶屋へ、夫婦ながらはいつて奉公致しております。それにつき、吉野大夫様、御国元の御家老、三郎左衛門様とやらの所をかけ落なされ、おまへがこの地にござると聞き、契情町は自由のならぬ所と、のんきの八兵衛が口入にて、この嶋の内に自前のつとめ、『やみの夜になかぬからすのこゑきけば、生れぬさきの父ぞ恋しき』といふ歌のごとく、とかぬ帯に容をなかせ、ふらずしてあはれぬ義理づめ、難波津に咲くや此花と名をあらためての御繁昌。夜かと思へば昼になり、昼かとおもへば月またさやけき、物日のせり合、春の花は船遊びのまくに開かせ、紅葉も色こく棧敷の毛氈にかゝやき、春夏秋冬万木千草も一日に花さけるはやり様。いかなる色男でも、まごとのお情にあづかりしものはひとりもなき所に、この間は京都のおさふらひ衆、おとしへには見ゆれどもお名は明神様と申しますが、小判の光は燈明より明かに、どふした御縁か大夫様の方よりなづみ心にならせられ、ひんとしたそり橋のお詞一度もこれなく、岸の姫松いく世経ぬらんと、したゝるいまでのおお味じやとの取沙汰、何やらいふておむつがり、御床たゞむ仲居どもは、今朝も十二燈のつゞみ紙ほど紙屑があつた」と申せば、宿屋の亭主が柏手たゞいて、『銚子もて来ひ。朝酒を旦那と此花様にあげねばならぬ』と居つゞけの所へ、『今日は手前の齋日にて、お住持様御出』。惣じて茶屋と申すものは、ばたくさと入りこむ所ゆへ、仏壇は二階に仕込みおきしを、勝手知にてお住持様はしごをあがり給ふ折から、『此花様身仕舞しにちよつといなして』と『台所へ御出』とが一時にて、和尚様、『さても美人め、あの様な菩薩を抱て寝るこそまごとの極楽ならぬ。榮耀にも榮花にも、げにこの上やあるへき』と、あまり見とれてはしの子ふみはづしぐはつたり。皿鉢膳棚くだけ、懐からは『諸法事大布施帳』と表書のしてある手帳とともに、お針のせんがきこへぬづくしの書ひてある名塩半切の文もひらけ、二徳たばこ入れから輪珠数もろともにころくこけて出でしは、

赤紙につゞみしはまぐりの貝入。とりちがへて『やれ、氣付さうな』とのませたれば、舌先がひり／＼としてす／＼おどろく心地がするとのこと、『やれ水を』と持て行けば、『この薬を用ひてから、水は禁物』とじゆつない中にも機能を覚へ給ひ、それゆへのお迎ひ」といへば、友仲は今日も明日もさめた心底。

「一人三郎左がかたを忍び、身をたづぬるとまではきこへたが、明神とやらこま犬とやら老ぼれ大尽にまはる段／＼、いかにしてもこらへられず」と、古筆筒より刀とり出して見られしが、

「イヤ／＼コリヤいふほどおれが恥といふもの。契情に誠なしとは看板うつしてしれてある事。それをまことにさせぬは、買人の無調法にて、欺すは契情の地といふもの。だまされたがはらがたつといふは、夢に見た金か眼かあひてからないとてはらたてるもおなじ事なるべし。契情のいつはり葱根のくさみがなくば、この界では人間の手はまはらぬでかなあるべし。もしまた葱根にくさみがなくば、鎗持に雛男つれたやうではりあいなく、契情に誠がありすぎたらば、桜の花さかりなる枝に、柿が実であるやうで面白がるまじ。よい／＼、売女めにつむがれたは、こちの鼻毛をぬかぬ故とあきらめたがよい」

と口ではいふて見れども、胸の内はもだくだして、ふみたい、たゞきたい心になるもおもひ過ぎての取り乱しにて、契情買は皆おなじ情なるべし。

料理人の三ふも、

「御尤でござりまする。女房どもども旦那のことは、あけくれ申し出してばかりおりますは、わすれもいたしません。ソレ井筒屋での大寄、上の間三拾余疊敷にしろかねの山については金の盃、一盃のめば、五百匁づ／＼下され、西の間の縁側三十余枚の障子ぎわには、小判の山をつかせて、しろかねの盃をいだされ、三盃のめば式十兩づ／＼いたゞいた御恩、大夫様のなされかた、わたしどもさへ、むつと致しておりますれば、是非とも御供いたして品によつたらば、わたくしども夫婦がしりもち致しまして恥か／＼せませぬ。それこそほんの此花さまでななふて、今を春部とかくやこの恥。大夫様も人の皮かぶつてござれば、よもや恥かしいとおぼしめさぬ事はござりますまい」

とたのもしくいふを、

「いや／＼、畜生に物いふ気はみぢんもなければ、さしあたって今日までのぼして見た鼻毛の下の養ひが第一。大名の火にくぼつたといふたとはあれども、粹(すい)かしにはまつたといふは身に思ひあつて口(くち)おしい。療治(りょうぢ)にはまいるべし。畜生めに身(み)が事、ふつく／＼いふてくれな」といへども、いふてくれよがしの輪廻(りんね)のきづな。

「むかしの栄花(えいけ)を今の身(み)でいふは不粹(ふすい)」

と、たゞ惘然(ぼうぜん)と三ぶに連れ立ち、嶋(しま)の内(うち)さしていそがる、

◆浮世の旅にまよひ来て／＼、夢路をいつとさだめん 「憂き世の旅に迷ひ来て、憂き世の旅に迷ひ来て、夢路をいつと定めん」(邯鄲)による。冒頭部の文句。

◆これは上塩町のかたはらに友といへる者なり 「是は蜀の国の傍に、盧生といへる者なり」(邯鄲)による。

◆上塩町 大阪府天王寺区にあり、いまは上汐町と書く。江戸時代は私娼街としてにぎわった。「島の内の芸子に深うなじみ、此春身うけして、爰から程ちかき上塩町に困うてあるからの事」(秋成・妾形気・四・一)

◆我大名に生れながら、政道をも心掛ず、只色事にあかしくらすばかりなり 「われ人間にありながら仏道をも願はず、ただ惘然と明かし暮らすばかりなり」(邯鄲)による。友仲が難波に来ることになった事情については巻一の二を参照のこと。

◆取り付き もとで。「わづかの取付千貫目にする程の人心、よろしき極め成べしと沙汰して」(西鶴織留・六・四)

◆あり所 居所。住所。「とつ様があるほどなれば馬をひはいたさね共、有しよしらねばかほも見ず」(近松・丹波与作・中)「彼の板がこひの惣領殿がおととひからありしよがしれず」(近松・生玉心中・上)

◆心当 あてにするところ。頼っていくところ。「こなたの尋ぬる心当(あて)はどこじや」(浄瑠璃・ひらかな盛衰記・四)「夫はお由を伴ひて、田舎の縁者を心あてに」(梅曆・四・二)

◆取りのき講 「取り除き無尽」ともいう。毎回の講日のくじに当たって落札できると、当日の掛金総額を一時に手にすることができる。

賭博の一種とみてよいもの。講の会合のあとは会食をすることが多かった。

◆動落庵 「道楽」をかけたもの。

◆紫袈裟 古く紫の袈裟は勅許がないと着られず、江戸初期には紫衣事件などがあつたが、後年はそうした規制もゆるんだ。「紅染(こうぞめ)の衣の上に紫の袈裟ををかけ、手には水精いらたかの教珠(けしう)をもち」(狗張子・六)。

◆旦那殿 ここは困いものや妾宅の主人。

◆数珠さきのおふさ 以下は僧やお寺にちなんだ事物を、困いもの・妾の名前に転用したもの。

◆大黒の槌 「大黒」は僧の妻や妾(「此寺の大黒になりたくば、和尚のかへらるゝ迄待て」(西鶴・五人女・四・二))。これに「大黒の槌跡」(庭にできるでこぼこを繁盛のしるしとしたもの。「庭に凸凹の出来るを俗に大黒の槌跡といひ其家繁昌の標といふ」(譬喩尽・一))をきかせて名前にしたもの。

◆陀羅尼 密教(真言宗・天台宗)系の呪文。梵語のまま唱える。

◆称名 浄土宗・浄土真宗で「南無阿弥陀仏」と唱えることをいう。

◆小借屋 小さい借家。まずしい生活を印象づける。「市門の曉鶏は、此西の方、あやしの小借屋といふ物軒をならべ、おのがさまさまの世渡り侘しげなれど」(鶉衣・七景記)

◆火ふき竹 火を吹き起すのに用いる竹筒。「笹の葉の風や螢の火吹竹」(犬子集・三)

◆さくら 細かに割った竹を束ねて、飯器などを洗うための道具。「団扇。竹は笥帯(ささら)のごとし」(南都名産文集)

◆ふのり 布海苔。磯の石に多く叢生する海藻。さらして干すと糊になる。以上は、どこの家にもあるような台所道具を並べたもの。「生死の大事のこすとはなし／をはりぬる法にふのりをときそへて」〔鷹筑波・一〕

◆豆腐屋は稀にして魚屋がち 豆腐は精進料理の代表。なまぐさ坊主たちがこの界限に多いことをいう。

◆木からおちた猿舞 「猿も木から落ちる」という諺にひっかけたもの。廓遊びになれてはるはずの友仲が、お家騒動に巻き込まれ、この地で貧乏暮らしをしていることをいう。

◆へへんのかみ 平気な様子をいうか。「猿舞」からのどうつづくかは未詳。

◆相借屋 同じ長屋に居ること。また、その人。「相借屋（あいじやくや）の噂（か）が相互いとて」〔其積・禁短気・三・一〕

◆何喰まいと継母ゆへ ことわざ「何喰おうとまな身」の「まな」に「継母」をかけた表現。「何喰おうとまな身」は気楽な貧乏人の境涯をいう。「夕に米唐櫃（がらと）をかすり、朝（あした）に薪絶へて、何喰まいとも俵（ま）な中にも」〔其積・禁短気・四・二〕

◆継母ゆへ流浪いたす なさぬ仲の継母とうまくいかないために、跡継ぎが家を出て諸国を流浪する、というのはお家騒動劇などの常套的なパターン。

◆須可滝養元 「姿は狂言」のもじり。

◆本道 漢方で、薬草の服用などを主とした内科的な治療を施すもの。外科や鍼灸などに対していう。「それはほん道にはあらで、針に心深かりける故に」〔仁勢物語・上〕

◆骨長 ある方面について経験豊かで内情までよく知っているもの。したたか者。遊里関係や趣味関係のことなどに使われることが多い。

◆いづれも馬鹿の骨張（こつちやう） 「好色万金丹・二・二」

◆爪仲間 「爪」は「鷲」「熊鷹」の縁だが、『新撰大阪詞大全』に「つめとは しわること」とあるように、ケチで欲の深い商人仲間のことひっかけている。

◆寸白 寄生虫及びそれによる病気のこと。また、男子の睾丸の大きくなる病気にもいう（その原因を寄生虫によると考えたため）。「それがしがば、此十日ばかり眼病氣にて候。とても次而にとて、すんばくもさし出候。すんばくの事は持病にて候ゆへ、是非に及ず候」〔休諸国物語・五〕

◆敗毒散 江戸時代ひろく愛用された漢方薬。寒気、高熱、体の痛み

など風邪の症状に多く用いられた。「効験は医案の外に見へて、敗毒散などももるにも」〔南嶺・大系図蝦夷断・二・三〕「よくよくみれば、敗毒散であつた。せきをやめいといふことか」〔咄本・口合恵宝袋（宝暦五年刊）・四〕

◆歴々 立派な。単に裕福なだけでなく、伝統や格式のあるものについていう。「又も懲りず竹斎は、或人大熱氣を煩ひけり。歴々の医師集りて、配剤する」〔竹齋・下〕

◆寺方 寺院関係。町方（まちかた）・在方（ざいかた）などに対していう。また、僧を敬つてもいう。「こどもには寺かたも見へぬ。寺町へ参り、頼みましよ」〔狂言記・泣尼〕「太緒に雪踏位勝げにはきなして、やつこ草履取をつけ、これを寺がたの通ひ扈従と申侍る」〔西鶴・一代男・四・五〕

◆引き合せ人がよきとて 欲深い商人たちが推薦し、妾らが仲立ちするので、秘密のことも相談できる医者だ、ということ。

◆色衣 墨染の衣でなく、僧侶の格式を示す紫や緋の色の衣。「四十四ふよの此比は、色衣（しきえ）を着し、うやまいも一字の寺をつかさどり」〔八百屋お七・上〕

◆旦那衆 「寺や僧に金銭を貢ぐ人」が原義であるが、ここは、檀家の主人の意。

◆沙汰のならぬ 話せない。話してはならない。「互ひにしめつしめられつ思はず誠の恋となり、サア此の上は今の事沙汰はならぬが合点か」〔近松・堀川波鼓・上〕

◆常体の 普通の。並の。「銀（かね）が銀もうけする世となりて、利発才覚ものよりは常体の者の、質（もとで）を持ちたる人の利徳（り）とく」を得る時代にぞなりける」〔西鶴織留・六・四〕

◆所化 修行中の僧。「所化の伴頭栄俊といふものは、学問の友として久しく断金の契をいたせしが」〔伽婢子・十〕

◆学寮 江戸時代、寺院で僧侶が修行するところ。檀上寺、寛永寺などに設置されていた。「逸正寺にかへり来て、恩を謝して学寮に在り。是よりして影西は、夜に日に仏学を研究して、又五七年を歴にければ」〔馬琴・八犬伝・百二十八回〕

◆湿 湿気の多い皮膚病。ここは、梅毒にかかったことをごまかしていう。「ある医者をやびて見するに、これは湿にあてられたるわづらひじやといふ」〔咄本・当世軽口咄揃（延宝七年刊）・二〕

◆打付に じかに。直接に。「寝た間も忘れず恋こがれ、思ひ余つて打付に、いふても親子の道を立て、難面き返事」〔浄瑠璃・摂州合邦

- 辻)
- ◆山帰来 ゆり科のつる性低木。根を煎じて梅毒の薬とする。「腫物となりて。此程顔にあらわれ。天窓に出てかくせ共かくされず。外科を頼で見するに。元来内証の疵より起たる腫物なれば。人中で様子も見られず。人の無小座敷の窓を明て人に見せぬ療治の仕様。凡そ三十日斗も立ど腫物はいよいよひろがり。今では山帰来を拾五兩づゝ内薬に入て飲るれども」〔南嶺・今昔出世扇・一・一〕
 - ◆ぬき紬 縦糸が木綿、横糸が紬の織物。あまり上等なものではない。「難波津に借屋此はな冬空にも、ぬき紬(つむぎ)の単羽織」〔役者枕言葉・大坂〕
 - ◆加賀絹 加賀国に産する生絹(きぎぬ)の織物。羽二重(はぶたへ)に似るがそれよりは安い。多くは染めて裏地に用いる。小松あたりで特に盛んに織られた。「薄鼠となりし加賀絹の下紐を、こどりまはしに裙(すそ)みじかく、柳に鞠五所しぼり」〔西鶴・一代女・五・二〕
 - ◆己の刻 午前十時前後。
 - ◆染分 種々の色に染め分けてあること。「染分(そめわけ)の組帯、せかいらげの長脇指」〔西鶴・一代男・二・三〕「紫の染分けの、上交(うはがへ)の褌(つま)風(つま)風(つま)にひらめき」〔其磧・禁短氣・四・二〕
 - ◆日野 日野絹。近江国日野地方産の絹織物。上野国藤岡地方産の上州絹なども、地質が似ていることから一般には日野絹と称した。「一人一色の役目、たとへば金襴類一人、日野(ひの)郡内絹類老人」〔西鶴・永代蔵・一・四〕
 - ◆療治 治療。「痛さは痛し寝られねば、これはいかなる療治やらんと問ひければ」〔竹齋〕
 - ◆この中 このあいだ。せんだって。「此中の古歌を大納言殿におたづね申たが」〔西鶴・一代女・一・四〕
 - ◆角前でつち 「角前」は「すみまへがみ(角前髪)」。額(ひたひ)の左右の角(すみ)を剃り込んだ前髪で、元服前の若者の髪型。そういう髪型の年若い丁稚。「角前髪(すみまへがみ)の若い者、同じ心の飛びあがりども四人、揃へ明衣(ゆかた)の染めこみに気をつくし」〔西鶴織留・四・三〕
 - ◆下寺町 大阪城東にある寺町のうち、いちばん西の町筋。天神橋筋東側に面して多くの寺院が並んでいる。「時雨の松の下寺町に信心ふかき心光寺」〔近松・曾根崎心中〕「一家一門にも見かざられ、終に乞食と成、下寺町の野はづれに寐て居たる折ふし」〔咄本・軽口浮瓢單(寛延四年刊)〕

- ◆自体 そもそもから。元来。「ちたい、だんなのしたぞめはの、かさねあづゝ屋といふみなみのちや屋のおとゝで、これへいりむこ」〔近松・重井筒・上〕「自体其方は平家の事を。譏奏したると聞及ぶ」〔南嶺・忠盛祇園桜・五・一〕
- ◆責念仏 念仏の唱えかたで、終りに近く最高潮に達したときに急調子で唱えること。「責念仏の生玉の春」〔大矢数・七〕「何れもわれいちとしこりかゝつてせめ念仏を申し、すでに廻向とおぼしき時」〔咄本・軽口露がはなし・四〕
- ◆是はしたり 意外なことに出会って驚いた場合や、思わぬ失策をした場合に発する語。「是はしたり 過ちたる時にいふ語也」〔俚言集覽・増補〕「コレ申し申し。是はしたり寝てござるそふな」〔浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・七〕
- ◆小天神 遊女の位。天神と鹿恋(かこひ)の間に位するもの。「あたま数よびて、いくらが物ぞ、天神・小天神と、せちがしこくきはめぬ」〔西鶴・一代男・五・五〕「その外口きく大夫天神、我れが馴染のおもはくを指折りみれば七十二人并に鹿恋小天神、月影分にいたる迄胸算用にてすみがたし」〔元禄大平記・四・二〕
- ◆わけのたゞぬ事 うまく処理できないこと。暗に借金のことをいうか。「わけをたつる 当道において、他の批判にあづからぬやうにする事也」〔色道大鏡・一〕「さりとは心よはい男かな。其わけたては我のぞみいふ事にあらず」〔其磧・禁短氣・四・二〕
- ◆新町 大阪の西横堀川と長堀川の合流点の北西一郭にあつた官許の廓。京の島原、江戸の吉原とともに日本の三大遊里の一つ。「其后寛永第八辛未年、道頓堀より今の新町(しんまち)に還(うつ)さる」〔色道大鏡・一三〕「目前の喜見城とは、よし原島原新町(しんまち)、此三ヶの津にます女色のあるべきや」〔西鶴・一代男・一・一〕
- ◆引はり 対抗すること、競争すること。前項にあるごとく、京の島原と大坂の新町とは並称されることが多かった。「ひつぱり 相対して競ふ意をヒツハリになると云」〔俚言集覽〕「操狂言の庄屋と歌舞伎の大屋と、引張(ひつぱり)な役さ」〔素人狂言紋切形・下〕「多羅福屋の親仁とひつぱりにて、ちと渋皮のむけたる女と見ると唯は通さず」〔世中貧福論・下〕
- ◆嶋の内 大阪の、北を長堀、南を道頓堀、東を東横堀、西を西横堀で囲まれた一面をいうが、特に、昼屋町、太左衛門橋筋あたりは私娼街で、近世中期以降、大阪第一の繁華街となつており、この地をいうことが多い。「繁花風土記・上」には「此地は花やかなる事を主とせ

し所なれば流行事はやり、詞衣裳の好み首のかざり身のまわりの事まで一段はやく此里より口切す。身じまひうるはしくして気取なく、器物等のきたひ酒食のあらけき魚物青物に至るまで、初物は此里を過ぎれば手に入がたく、誠に青楼の竜虎にして黄金をかたぶけんと心をゆだぬる人は此世界に入らで又いづくにか入らん」とあり、四方の運河を利用した商業も盛んで、船場(せんば)と並ぶ大阪の代表的な商業地域で、裕福な商人も多かった。「とかく此節嶋の内。御はいくわいかたく無用といさむれども」(南嶺・丹波与作無間鐘・四・一)「鞆(うつば)の干鯛(ほしか)屋の番頭といふ者。新町嶋の内がよひに親方の手前二三度も不埒な品も有たとの咄し」(秋成・妾形氣・二・一)

◆肩きる 威勢のいいさま。「刃ものでも切ぬ風をば肩て切」(柳多留・一五三)

◆口入 仲介。あつせん。「早速に口入を頼み。かの繁野を一夜百疋の相對にて。ひそかに次郎太夫方へ通達すれば」(秋成・妾形氣・三・一)

◆自前 「じまへかせぎ(自前稼)のこと。遊女や芸者などが置屋に抱えられず、自分の居を定め、独立して稼ぐこと。乃ち置屋に得意ありて、揚屋以下よりこれを置屋に迎へ、置屋より是を其自宅に迎ふ也。此徒を自前かせぎ飯見世の女郎或は芸子と云也」(守貞漫稿・二二)「かけのとれぬ自前の女郎には。もし此銀濟申ぬ時は。五年切て其許の奉公人に成。つとめ申しと請合をたせ」(南嶺・龍都俵系図・一・三)

◆やみの夜になかぬからすのこゑきけば、生れぬさきの父ぞ恋しき 禅の悟りを詠んだといわれる道歌。作者は一休禪師とも白隠禪師とも足利義政ともさまざまに言われている。「まつくらな闇の夜に鳥が鳴かないでじつとして。羽音も立てず、鳴きもしないから、本来いゝるかないかもわからないのであるが、そこにしつかりと鳥がいて、鳴かない声がきけるようになったら、その時こそ、親のことが全面的に理解できたと言えるし、父母が身近かで自分と一体となり恋しいものとなる。そこではじめて禅の悟りにつながっていくのである」というような教を含むとされる。「よし恨むまじ嘆くまじ。泣くまい泣くまいなかぬ鳥のこゑきけば、むまれぬさきの我子恋しき」(近松・兼好法師物見車・中)「飲や調や一寸先は闇の夜に、鳴ぬ鳥の声聞(け)ば、拾ぬ先の金ぞ恋しき」(源内・根無草後編)「やみの夜になかぬからすのこゑきけば、生れぬさきの父ぞ恋しき 東山義政公の詠なる

よし、長頭丸隨筆に見えたり。生下未分といふ冊子には、母ぞこひしきに作れり」(隨筆・三養雜記(山崎美成)・二)

◆とかぬ帯に客をなかせ、ふらずしてあはれぬ義理づめ 前項の道歌のように、なにもせずして客を呼び寄せるさまを誇張している。

◆難波津に咲くや此花 古今集仮名序に出る「なにはづにさくやこのはな冬ごもりいまははるべとさくやこの花」にちなんで此花という源氏名にした。

◆夜かと思へば昼になり、昼かとおもへば月またさやけき 「夜かと思へば、昼になり、昼かと思へば、月またさやけし」(邯鄲)による。

◆物日 近世の遊里における特定の祝日。この日、遊女は馴染(なじみ)の客に売ることを親方から強いられた。客のないときは、みずからその代金を出さねばならなかった。一方、客は馴染の揚屋(あげや)・遊女に祝儀・物品を贈るのが習わしであった。日は遊廊ごとに異なっていたが、月に数日あり、五節供などの生活行事の日や祝祭日と重ねた日が多かった。紋日(もんび)、売日(うりび)とも。「座摩・稲荷・天満・住吉の御祓(はらい)にかこつけるは、傾国。茶屋・風呂屋の物日(ものび)せはしく」(新色五卷書・五・一)

◆春の花は船遊びのまくに開かせ、紅葉も色こく棧敷の毛氈にかゝやき、春夏秋冬万木千草も一日に花さける 「春の花咲けば、紅葉も色濃く、夏かと思へば、雪も降りて、四季折々は、目の前にて、春夏秋冬、万木千草も、一日に華咲けり」(邯鄲)による。

◆おとしばへ お年延へ。かなりの年配。相応の年齢。「若い者ならば浮気の沙汰共申さるべきが。人に異見もいたすべき年ばへをして。甥などの手前も恥ず申出すからは覚悟しての事」(其磧・都鳥妻恋笛・三・三)

◆明神様 神格の高い神社やその祭神をいう。「明神(みやうじん)号 神宮を上とし、明神是に次。今世俗都(すべ)て諸社を称して何某の大明神と称するものは誤りなり。明神は勅許の号なり。勅許なきは何某の大神、亦、何某の神社と称す」(神道名目類聚抄・四に)

◆なづみ心 なづむは 思いを寄せる、ほれ込む、執心するの意。「なづむ おもひ入(いれ)て執着する心なり。心外(ほか)にあらずして一すちにかたぶく。(かたち)也。なづむといふもふるき詞なり」(色道大鏡・一)「夜毎夜毎に丸山の廓へお通ひ有て、名山とやら申傾城になづみ給ひ」(歌舞伎・韓人漢文手管始・一)

◆ひんとしたそり橋のお詞一度もこれなく 未詳。「そり橋」は太鼓橋。

- ◆岸の姫松いく世経ぬらん 「我みてもひさしくなりぬすみのえのきのひめまついくよへぬらん」〔古今集・雜上〕による。
- ◆したたるい 甘ったるいさま。色ごとの方面についていうことが多い。「したたるき物、あひほれの目もと」〔犬枕〕「此したたるいを好むわろは、しらすらうべつたりとした事をいへば、殊の外悦ぶものぞ」〔其磧・禁短氣・五・一〕
- ◆仲居 京阪の遊廓・岡場所の揚屋・色茶屋にいる女中で、客への接待を務めとする。客・芸妓を送迎し、客の羽織を畳み、茶酒を運び、座敷の酒席に客と同席して座を取り持つ。登楼した客の意を受けて芸妓を呼びにやり、時には客と芸妓との仲に立ちなどし、諸事客のために働く。夜間は交替して起き番を勤める。「二階座敷、ソレ灯をともせ中居共、お盃お煙草盆と」〔浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・七〕
- ◆おむつがり 闇中で女性が喜悅することをいう。「内義はしきりにすゝりむつかり、つゞけつゞけものしける内に」〔好色大福帳・二〕
- ◆十二燈 元来は一年十二か月になぞらえて神仏に供える十二本の灯明のことであるが、実際には、その代金として包む錢十二文をいうことが多い。「十七夜代待の通りしに十二灯を包て我身の事すへずへしれぬやうにと祈ける」〔西鶴・五人女・三・五〕
- ◆居つゞけ 遊里語。遊女屋に遊び、日を重ねて帰らぬこと。流連。「二度に成り、三度に成り、四度目は面白し。五度目はかはゆふ成り、それから連れも邪魔に成り、十日も廿日も居つゞけのたはいなし」〔浄瑠璃・夏祭浪花鑑・一〕
- ◆齋日 命日などに、僧を招いて行かう法要・仏事。午前中に法事を行い、午後、供養のために食事を供するのが通例であった。「曲輪にも納豆の匂ふ齋日哉」〔太祇句選・冬〕
- ◆ばたくさと あわただしく行うさま。ばたばた。「四条五条にほこりこそたて／ばたくさとすきや畳の面がへ」〔鷹筑波・五〕「不断は手をあそばして、足もとから鳥のたつやうに、ばたくさとはたらきてから、何の甲斐なし」〔西鶴・胸算用・四・三〕
- ◆仕込みおきし 奥の方に置いてある。
- ◆勝手知 中の様子を知っている。内情を知っている。「一見の客取込つれし。戦場の勝手しりにて。コリヤ勝大尺様のお入」〔南嶺・魁對盃・三・一〕
- ◆菩薩 遊女。「されば野郎に能筆は稀也。女郎は下品下劣の局菩薩まで、筆の歩みの悪(あ)しきはなし」〔其磧・禁短氣・二・二〕「初会にはぼさつもツントはすに座し」〔柳多留・二二八〕

- ◆榮耀にも榮花にも、げにこの上やあるべき 「榮花にも榮耀にも、実此上や有べき」〔邯鄲〕による。
- ◆はしの子 階段やはしごの一段一段。「たとへば、はしの子を一つゝあがるに、いそがんとて二あがるゆへに、おつるがごとし」〔長者教〕
- ◆ぐはつたり 物が倒れたり落ちたり突き当たったりするときの擬音語。「がつたりは、もろくたふれたるかたちか。又物にあたりてかたき音か」〔かたこと・五〕「昇(かい)て出でたる破れ駕(かこ)広間にぐはつたり」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・三〕
- ◆きこへぬづくし 「きこえぬ」は「理不尽である。あんまりだ」の意。うらみごとを並べたててある様子。
- ◆名塩 摂津国有馬郡名塩(兵庫県西宮市名塩)。和紙の産地。室町末頃、名塩村の東山弥右衛門が越前より鳥の子紙・奉書紙の製法を伝え、原料に泥土を混合して変色を防ぐなどの工夫により、名塩紙あるいは間似合紙と呼ばれて全国に広まった。「殊に名塩(なじを)・山口の紙中衆(かみなかしゆ)。爰(ここ)を通るに」〔新色五巻書・三・五〕
- ◆半切 半切紙 縦が普通の半分の大きさの紙。現在の半紙に相当する。書簡なども、紙が高価ゆえにこの紙を使用するようになった。「半切紙 縦短く尋常の半分なり、筑前・筑後を上と為す、摂州大坂、同じく山口・名塩多くこれを出す、播州亦たこれに次ぐ」〔和漢三才図会・一五〕「京大坂とも妓の文は尋常の半切なるに。伊勢ばかり古風のこりて堅文なるもをかし」〔馬琴・羈旅漫録〕
- ◆二徳 紙入れの一種。鼻紙と手回り品を入れて、外出の時に懐中にするもの。「二徳の用 一に紙入れ二に薬入れ也」〔譬喩尽・一〕
- ◆輪数珠 三十六個の珠を連ね、輪違いにした数珠(じゆず)。浄土宗で用いる。「こんな事も出にや聞かれぬ。ア、有難い南無阿弥陀仏と。輪数珠繰り繰り出でにけり」〔近松・心中宵庚申・下〕
- ◆赤紙 薬を包むのに用いる。「唐人秘密の薬といふ物を。赤紙に包み」〔南嶺・教訓私儲育・一・三三〕
- ◆はまぐりの貝入 はまぐりの貝殻は焼いて粉末にし、薬になった。喘息・胸痛・悪寒発熱・陰痿・煩満などに効能があったという。
- ◆気付 気付け薬。陰痿用のはまぐりの粉を気付けに用いようとしたのである。
- ◆じゆつない中にも 苦しがつている最中に。「酒をのむとて酒にのまれて、かやうに道中にてころびたをれ、顔をすりむき足を打やぶり、

術(じゆつ) なさうな体たらくちや」〔浮世物語・四・三〕

◆まはる 遊里で、遊女が客の意のままに行動する。「まはる 男の氣にちがはじと、女のかたよりしたがる貌なり。たとへば風車の風にまかせてくるくるとまはるやうに、男の心にしたがるなるべし」〔色道大鏡・一〕「亭主が連飛、花車が蜘蛛舞、下女下男が風車、是れ自然とまはるにあらず、当代金山まぶらうめき渡る勢ひなり」〔御前義経記・二・一〕

◆契情に誠なし 遊女のいうことはすべて商売上のことで、本当の氣持ちではない。この種の言い方は「傾城に誠があれば晦日に月が出る」〔傾城の誠と琴箱の反らぬはない〕「傾城の誠と卵の四角なのはなし」など数多くある。「けいせいに誠なしと世の人申せども」〔近松・三世相・三〕

◆看板うつて 看板を掲げることから転じて、世間に広く知られていること。有名であること。「足もとへどつかとすわりし有りさまは。追ひはぎの大将と看板」打たぬばかりなり」〔近松・嬬山姥・四〕「鬢もそけて。ねをきとは看板打たる顔つきを」〔南嶺・丹波与作無間鐘・一・三〕

◆それをまことにさせぬは、買人の無調法 「無調法」は遊郭での遊び方を知らないこと。遊女がうそをついて客に対するのを、本気にさせていくのが客の腕というものであり、遊女が本気にならないのは客の遊び方が下手なせいだ、ということ。「此たびめしつれのぼり、ついでながら粹にもなしてとらせたく思へども、あなかのぶてうほうを大ぜい引ぐしてのぼるもいやなり」〔役者談合衝・京〕

◆地 もともとのあり方。普通のこと。「へん其くれへな兩用言葉は、おいらア地だ。夜湯へ這入る時は、真ッ闇(くら) 御免なさいッ、ちよいと客が来れば、コレお茶ばこぼんを持って来いヨサ」〔和合人・二・下〕

◆がなあるべし でもあろう。「がな」は巻一之一の注釈に既出。

◆是も何ぞの因縁でがなあらふ」〔歌舞伎・幼稚子敵討〕

◆鑓持に雛男つれたやう 釣り合わないことのとえ。「鑓持」は武士が外出する時に鑓を持つて従う下僕。近世、百石以上の武士になると鑓持一人を従えることができた。「鑓持 大鳥毛対の道具、かゝり第一の者なれば大男にしくはなく、もみ鬚に毛巾着、足拍子一風あり、何れも丈夫のたぐい達者を第一とする、道中におめて鑓かたげて馬に乗たるは面目もなき次第なる」〔人倫訓蒙図彙・一〕とあるごとく、大男がよしとされる。「雛男」は雛人形のようにやさしげな男。「年

の頃二十四五なる男たゞ一人、刀脇指は腰に横たへけれども、けたれてなまぬるき色の白きひな男なり」〔東海道名所記・一〕「春を重ねしひなおとこ、一つなる口桃の酒」〔近松・曾根崎心中〕

◆つむがれた 逃げられた。他の男に乗り換えられたことをいう。「紡は糸をひく也。績はひねりつけること」〔増補俚諺集覽〕

◆鼻毛をぬかぬ 「鼻毛をぬく」は他人をだますこと。ここは、自分のだまし方(遊女の扱い方)が下手だったからだだと納得しようとしているところ。

◆もだくだして 思い乱れるさま。「自脈取やらもだくだと居姿くづれてわけもなし」〔十二段・三〕

◆契情買は皆おなじ情なるべし いわゆる草子地にあたる部分。

◆大寄 遊里語。大勢の客が、多くの遊女を揚げて一所に遊興すること。「大寄(おほよせ) 客の友どちをあまた誘引して行き、女郎を大勢寄せて、一所に参会するをいふ」〔色道大鏡・一〕「太鼓の清介が、持つてひらいて、大よせの中にて語りぬ」〔西鶴・一代男・六・七〕

◆あまつさへ此の比は大寄(よせ)といふ事を始め、十二軒の風呂屋より十二人の女を選び出し、能狂言の安宅をやつして、面々が身の上を懺悔し、是れ一番を客のもてなしとす」〔御前義経記・五・四〕

◆上の間三拾余疊敷にしろかねの山については金の盃、一盃のめば、五百匁づゝ下され、西の間縁側三十余枚の障子ざわには、小判の山をつかせて、しろかねの盃をいだされ、三盃のめば式十匁づゝ「東に三十余丈に、銀の山を築かせては、金の日輪を出だされたり」〔邯鄲〕

をふまえた表現。

◆むつと 不愉快に思う様子。「嵩(かさ)にかゝった云分をむつとはすれど是非もなき」〔浄瑠璃・八百屋お七・中〕

◆品によつたらば 次第によつては。事情によつては。「品によつたら見せまいものでもないが。マアそれよりはこな様の此懐を」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・五〕

◆しりもち かげで力添えすること。「てれん上人といふ此宗旨の尻持、強(あなが)ちに女道宗を破して」〔其積・禁短氣・一・一〕

◆今を春部とかくやこの恥 前出「なにはづにさくやこのはな冬ごもりいまははるべとさくやこの花」の下の句のもじり。

◆人の皮かぶつてござれば 人間であるから。「人の皮かぶつた畜生」という諺をふまえたもの。「コレ栄耀がしたさじや皆欲じや。人の皮着た畜生(ちくしやう)めと」〔浄瑠璃・新版歌祭文・野崎村〕

◆のぼしてゐた鼻毛 「鼻毛をのぼす」は男がほれた女などに気を許してだらしくふるまうさま。「くわをぬかして咄す夜の長ひは燈心、庚申の晩に晩にと言のぼした、鼻毛にあらぬ癖のかづかづ」「癖本・即興癖(寛政六年刊)・序」

◆大名の火にくばつた 泰然としてゐること。なにもできないでゐること。「けなお子や、ようむつからず気詰りな辛抱、大名の火にくばつたとの譬への詞に違ひなし」(浄瑠璃・河内国姥火(正徳三初演)・四)

◆はまつた ひつかかる。だまされる。「皆人賢過て、結句近き事にはまりぬ」(西鶴・胸算用・一・四)

◆ふつふつ ふつつりと。きつぱりと。「医者料理ずきは。医者

○卷四之二

二、一村雨いちむらもふりにくい大尽おほじん

【梗概】

道頓堀嶋の内の茶屋池庄の一室では、此花(吉野大夫)が馴染の明神様と呼ばれる京の大尽といつしよにゐる。此花の相手はいやしからぬ人柄ではあるが、白髪しらげの老人である。さて、池庄に着いた養元(友仲)は早速診察を始めた。その姿を物陰から見ていた此花は友仲であることに気づき、自分も「つかえ」が起こつたから見てほしいと頼む。その声が此花であることを知つた友仲は薄情な女に調合する薬はないとにべもない返事をする。此花は友仲を怒らせた原因の馴染客が、実は住吉左京大夫であることを知らせたいと思ふが、住吉左京が友仲を見つけてしまえば、京に連れ帰り左京の娘と一緒にさせることになるだけだと思ひ返し、左京を帰らせたあとで会いたいと声をかけるが、相変わらずつれない返事しかしない。そこへ左京があらわれて、友仲を認め、すぐに京に連れ帰り、娘と一緒にさせるといふ。此花は友仲にすがりついて「やつと見つけた恋人なのに、殺されてはなさない」と嘆く。ここではじめて友仲は大夫の本心を悟るが、とはいつても、こんなならしない自分を最後まで誓として認めてくれる住吉左京への義理もありどうすべきか迷つてゐると、大夫は、匕首をもって「自分が死ねば、あなたの一分は立つはず」と死のうとする。それを住吉左京があわてて止め、「大夫の本心はわかつた」とあかし、大盤振る舞いとなる。一座も華やぎ、友仲は昔どおりの大尽遊びにうつつを抜かし、あとは大夫と小座敷でびつたりと添い寝、と思ひきや、薬箱持ちの角八の「申し申し」という声に思わず目が覚め、あたりを見ればもとの上塩町の借家。その薬箱にもたれてうたた寝をしてゐるのであつた。すべては夢であつたことを悟り、大夫が道頓堀に来るはずがないと、なお迷つてゐる自分に涙を流した。

製法にあらずと。ふつふつおもひきりて」(南嶺・大系凶蝦夷斬・二・三)

◆いふてくれよがし (此花に)言つてくれと言わんばかりの。

◆輪廻のきつな 深くつながつてゐる故の執着心。「外面似如菩薩内心如夜叉。あみのうちに磨(とぎ)すます、刃はするどしといへども、輪廻のきつなは切にきられず」(和漢乗合船・二)

◆惘然 呆然と同じ。氣抜けしてぼんやりしてゐるさま。「そも何とせん、と周章し、惘然として立在給へば」(馬琴・弓張月・二十九回)。
なお、「邯鄲」に「ただ惘然と明かし暮らすばかりなり」とある。

【校訂本文】

玉の御輿に乗りそこなふて、二度のつとめの吉野の花。また咲きかへす難波津の、梅とひらくや此花が、心にそまぬ思ひぐさ。いからしてとけにしや、人品は高上なれども、ぬけばかくるゝほどの薄白髪、色気見えぬ京の大尽明神様とうやまい、かはるなかはらじの心中づくし。池庄が座敷のにぎはひ、めつた打ちのつゆに時ならぬ花さけば、仲居どもが一盃げんに紅葉も色濃く、

「ひとつたへませぬ」

とくへば、

「小判もふりて、つきてのない無間の鐘が」

とくへめく最中、中二階より

「上塩町の医者殿のおりさつしやる。それくすり箱」

ととりよすれば、養元ふるしきをとき、

「アノ、いかむつかしういさる。アノお寺様のおちさつしやれたは、眼色即落と申して、一通りの打身ではいざらぬ」

とくすりあはすともしらず此花は、はしこの下にて夜食くひかけて居たりしが、見れば見るほど友仲様にまぎれはなし。「これは」と飛び立つばかりなれども、人目あればそれと知らせたい心づかい。

「申しお医者様、私もつかへがおこりまして」

とくへまきふりかへり、

「ちてこそ」

とさじ取り直し、聞かぬ顔にて、

「ム、あのお寺の右の脈が沈にして、却而数のあるは合点がゆかぬ。沈とはしづむとよんで、このやうにしづみはてたる身のはてには、誰がさせたことぞ。沈んでも数く思ひくらせし甲斐もなく」

と、ひとり言いへども、亭主は何の気もつかず、

「お医者様へ御酒ひとつあげませいで」

と、生貝のふくら煮も耳の所まじりに、むし鱧も頭の所の焼いたをいませば、いかに銭にならぬ客とて、むかしを思ひ出しながら、

「コレそんな女中様、つかへがおこつたらば、お客様になでおろしてもらわつしやりませい。シタガ二階のお寺様もおまへを見てのうちみ。身を打つたは誰もおなじ事ながら、只今このさじにかけてみる甘草のあまみにくいつき、むしがおこつて熱がつよく、寒の内でも紙子ひとへもうとれる医者では御ざりませぬ。犬にのます薬はまたより外しりませぬ程に、つかへがおこつたらば、八百屋へなりともいふてやらつしやれ」

と、また心肝腎脾命門ひんしやんと腹たつれば、此花は、「さては、様子をきかんしてのはらだち」と合点したれば、

「奥なお客は、住吉左京様」

と打ちあかしていひたけれども、それでは友仲様を連れてかへり、娘御と夫婦にせうとあるはしれた事。所さへしれてあれば、はしり込み、自前の自由さ一刻もはやふいなしまして、住吉様にあはせともないと、

「奥にはどの様なお為にわるい人が居やうやら御存もなうて、はやふ御帰りなされませいで」

と人のきかぬ内に、ささやくほど腹立ちがまさつて、このやぶ医者、

「そもく、さじを手に取つてよりこの方、畜生に療治のけいこいたした覚えはこれない」

と、安薬箱の檜蓋とともにひぞれば、此花もさじかげんとりかねての最中、奥の間より

「此花は何して居るぞ。いねといふ事か」

と、腹たてゝ出らるゝを、あはせまじきとこたつをへだてゝ、友仲をうしろにかくせば、

「かくれまい、友仲。見わすれ給ふか、住吉左京大夫じやが」

と聞いてびつくり。薬箱蹴ちらし逃げ出るを、大勢にとめさせ、

「貴殿伯父田山悪心と聞き及びし故、お上へ願ひ貴殿をまつ身が方へあづかり置き、そのあとにて田山父子が悪事をあらはし、めでたく国を治めさせんと、わざ／＼高使にくだりし所、はやまつて行方しれず。貴殿をたづね出したる上に、何事も取りはからはんと、さまざまに心をくだく所に、けいせい吉野はこの嶋の内に此花と名をかへてつとむるよし。さだめて貴殿としのびくの通路あるべし。尋ね出して娘と夫婦にせんと、はかりごとの色がよひ。今日あふは娘と縁のつきぬ所。サア／＼京都へ同道申さん」

とあれば、此花は

「いかにも仰せの通りと見ぬきましたれども、友様の行衛、わしがちからではゆかぬ所、おまへにたづねさせてそいたばかりに、一度顔見せてさへ下さんしたらば、ふつくと思ひきりませふと申し上げましたれども、見たればむかしのいとしひ男。殺さるゝとてものはなちはせじ」と、友仲にしがみつき、なくより外に言葉もなし。

友仲もはじめて大夫の心をしり、

「あやまつた。こらへてたも」

と袖をしぼり泣かれけるが、

「住吉殿へは面目もなき対面。これ大夫、そなたの志は詞にもつきぬうれしきなれども、かくまで悪性なる某を婿と思しめして、これまでの御苦勞そなたと添ふては侍が立たず。また、住吉殿の心にまかすれば、かはゆさうにそなたの心中も無になる。いかゞせん」とさしうつぶけば、此花は、友仲が抜いて置いたる、相口取つて抜き持ち、

「わしさへ死ねば、おまへの一分はたちます。息のかよふうちには、人の男にせうといふ納得はなりませんねば、さらば」と既にかうよと見へけるを、住吉左京あはてゝとびつき、刃物もぎとり、

「心中見とゞけ申した。ありやうは身が娘は不慮の事にて先月に相はてしゆへ、そちが心中見とゞけ、娘にして、友仲殿にそはせ、播州一國の騒動をも、お上へ願ひて詮議せんと、一度約束したる婿を大切に思ふ心から、かくははからいたる住吉が志、娘にする約束の大酒盛、皆くきまへ」と、くはつと黄なるものまかせ給へば、

「コハありがたし」

としめりけがとれて、めつきりと春めけば、此花は、かたじけないともありがたいとも言ふ言葉さへ涙にくれ、

「久しくあはざりし物がたり、つもる事どもゆるりと咄されよ。氣を通せ者ども」と、皆く引きつれ大座敷へ出で給ふ。粹な舅ぞたのもしき。

友仲はあまりの事に物も言はれず。亭主は、

「小座敷にお床とらせて置きました。マアおやすみ」

とおしやれば、いやでもなし地のねやの盃とりぐに、

「いざや飲まふよ」

と、ふすま引きたてゝ入り給へば、住吉殿は、

「おつ付け迎ひを下すべし。ずいぶん馳走して、附は身が家来方までさしこすべし。物入に目を付けた。このよし申せ」

と言ひ捨てゝ上京あれば、それより友仲はむかしにかへる阿房殿、いたり遊びはあきらけき、雲龍のとり出大尽金銀は砂と散らし、ちよつと出る小めろまでも光をかざる御仕着せ物、

「誠に名に聞し寂光の浄土喜見城もげにこの上はないはつ」

と、大夫とひつたりと添寝の所へ、薬箱もちの角八が、

「申し〜」

とおこす声、

「谷町筋の正楽寺様から急に、お見廻なされて下されよとの使」

といふに、眠のゆめはさめにけり。

養元はゆめさめてく、おきあがり見れば上塩町薬箱にもたれ、氣くたびれのとろく休み、

「さては夢でありしよな。さばかり多かりし仲居たいこ大夫が声と聞しは、となりの唄が夫婦いさかひのひびきなり。にしきの床と見えしは、たゞうす綿の木綿布団、南無三宝く、よくく思へば、あまりなつかしさの夢なるかや。大夫がなんの道頓堀へ出ようぞ。このうへはまだ間短になつた夢見まいものでもなし。げにうろたへまじや、間短の、夢の世ぞ」

と猶まよふてぞ泣かれけり

◆玉の御輿 「玉の輿」は「美しく立派な輿」。ことわざ「女は氏無くして玉の輿に乗る」によつた表現。富貴の人の妻となり、不相応の身分に上ることをいう。「女は氏なふて玉の輿（こし）と云ふは、此奉公の事なり」〔新色五卷書・一・二〕

◆二度のつとめ 請け出された遊女がまた勤めに出ること。また、勤める遊郭をかわること。「お藤は我身をそれに極めて。もとの親方へ二度のつとめ」〔秋成・妾形氣・三・二〕「博多の廓へ。二度の勤は寫原へなりと、何でも金儲けにするのじゃ」〔歌舞伎・韓人漢文手管始〕

◆思ひぐさ はまうつぼ科の寄生草本であるが、その名前から、物思いにふけるさまや物思いの種に見立てて用いる。「つれなき故に思ふなり。一方ならぬ思ひ草」〔恨の介・下〕

◆人品 人柄。人格。「やはらかなる事をあてがへは、人品がそこねるとてうけつけず」〔南嶺・教訓私儲育・一・二〕「流石お家の家老職と、云ねどしるき其人品（じんびん）」〔源内・神靈矢口渡・二〕

◆心中づくし 互いの愛情を誓ひ合うこと。

◆池庄 前出「池田屋庄三郎」を略した家号。

◆めつた打ちのつゆ 「つゆ」は祝儀。祝儀を渡すことを「露を打つ」

とろく休み、

「露に打つ」と言つた。「めつた」はやたらに。むやみに。ここは、やたらにたくさん祝儀をばらまいたことをいう。「我世ざかりに七夕の日のうちに六十両露にうちしも」〔西鶴置土産・五・一〕「逢た夜の・顔が暁の涙と変ずれば、昨日露打し客の今日呑あらしの酒罌を貰ふ」〔艶道通鑑・四〕

◆時ならぬ花さけば、仲居どもが一盃きげんに紅葉も色濃く 「春の花咲けば、もみぢも色濃く」〔邯鄲〕による。

◆小判もふりて、つきてのない無間の鐘 「無間の鐘」は浄瑠璃「ひらがな盛衰記」(元文四年初演)の四段目「梅が枝の手水鉢」による。百両のお金が必要なため、小夜の中山の無間の鐘をついて祈る気持で、手水鉢を鐘になぞらえて打たんと柄杓を振り上げたところ、二階からひそかに黄金を投げる者がいてお金を授かるというもの。ここは、鐘を打ったわけでもないのに小判が降ってきたと騒いでいるというところ。

◆眼色即落 目の色が変わっている、というのをむずかしく言つたもの。

◆夜食 夕食。「はなしの中(うち)に小雛は夜食を喰(たべ)かゝり、主従三人睦ましく食事をなし、小雛は巨燵に入りてすやすやと眠

る寝顔の美しく」〔春色恋白波・初・五〕

◆つかへ 気苦労や気鬱などをきつかけに、胸から固まりがつかのぼり、のどにつかえた感じがして、飲食物が通りそうもない症状。時には息が苦しく、胸のあたりに激痛を伴ったりする。「むねのつかへなど、ありてなきわづらひの出でくれれば」〔色道小鏡・二〕「母は持病の血の道に、おさるが事の日より、しやくのつかへに胸いたみ」〔近松・鐘権三・上〕

◆沈 漢方で脈がかすかであること。「脈とては浮中沈をも弁せず」〔醒睡笑・四〕

◆生貝のふくら煮 生(なま)の貝、特に、あわびなどを煮たもの。「ふくらいり」ともいう。高級な料理だが、遊客ではない友仲には耳の部分が出されたもの。「ふくらいり なまこを大きに切り、だしたまりふかせ、出しさまに入れ、そのまゝ盛る事也。すつほうとも云ふ。あわびいかもよし」〔料理物語〕「つちくれ鳩、芹やき、あるへいたう、生貝(なまかい)のふくら煎を、川口屋の帆懸舟の重箱に一ぱいと」〔西鶴・一代男・六・四〕

◆むし鱧 鱧を塩水に浸し、砂上で藁藁をかぶせて温湿の氣にて蒸し、陰干しにしたもの。若狭産が上物。これも、前項同様上客には出すことのない頭の食べにくい部分が出されたわけである。「蒸(むし)鱧 若狭及び越前より出る大さ尺許の者、塩水を以て、蒸し半熟せしめ取り出し、陰乾すること数日にして、炙り食す」〔和漢三才図会五二〕

◆甘草 まめ科の多年草。根には甘味があり、甘味剤となる。また、これを生のままあるいはあぶって、薬用として用いる。「此長者どの人參も今は甘草(かんぞう)のあまみもなく成りける」〔町人考見録・中〕

◆むしがおこつて 「虫がおこる」は幼児の原因不明の腹痛などという。「積(しやく)の虫がおこれり」〔西鶴・永代蔵・四・一〕

◆うとれる 未詳。

◆犬にのます薬はまたゝびより外しりませぬ程に 「またゝび」は猫の大好物。それを犬に飲ます云々と答えて、つつけんどんにしているわけである。

◆心肝腎肺脾命門 いわゆる五臓(心臓・肝臓・肺・腎臓・脾臓)のこと。「臟腑 ザウフ(五臓は心肝腎肺脾命門々々腎同位也)」〔天正十八年本節用〕とあるごとく、「命門」は「腎蔵」(一説に「腎は左の腎臓、命門は右の腎臓)のこととされる。「左は心肝腎右は肺脾

命(めい)門也。命門と腎と同位也」〔下学集〕「五三年が間、心肝腎肺脾の間に積りつもつて候へ共」〔咄本・竹斎はなし〕

◆ひんしやん はねつけるように、そっけなくする様子。すねたり、反発したりしているときの様子。「褌袖ひいてもひんしやんとせず、にったりとする顔ばせ」〔新色五巻書・四・一〕「下女たるものは、お寝道具を運んで床をとり、ちとおやすみ成されませうとわらひ顔にしりめづかひ、ひんしやんとしておのれらは台所にかいこけながら夜をあかしけるとかや」〔御前義経記・八・二二〕

◆いなしまして 帰らせて。去らせて。「爰をあげて早くいなして下され」〔其磧・都鳥妻恋笛・三・二二〕「あのげい子迎ひが来たらいなしてたもといはるれば」〔秋成・世間猿・三・三三〕

◆ひぞれば すねて腹を立てていると。「嘘つくが役、偽(だます)が所作なれば、泥愛(べたつく)も否背(ひぞる)も客によりて変化し」〔艶道通鑑・五〕「あつ革な雪踏の裏のかね言もふみ違へてはひぞるばかりに」〔徳和歌後万載集〕

◆色がよひ 色町に通うこと。遊郭通い。「しりて居ながらかゝる色通ひを止ざるは、自暴自棄とて聖の戒にもたがへり」〔咄本・二休咄〕

◆こらへてたも こらえてください。「たも」は『俚言集覽』に「たも…たもれとも云ふ。たまはれ也」とあるように「たもる」の命令形(というよりは依頼形)。女性語であるが、このように男性である友仲が使っているのは、女性に謝っている場面だからである。

◆悪性 酒色・ばくちなどの遊興にふける性質。遊興好きで好色な人柄。「悪性 悪人のみをさしていふ詞にあらず。当道(＝色道)にてても、いたづらなる者をいふ。悪性を題する歌、風呂すまふ芝居兵法おとこだてしやみそばきりにばくち大酒」〔色道大鏡・一〕「なぜ若殿を悪性ものにはいひたてた」〔其磧・風流宇治頼政・二・三三〕

◆侍が立たず 武士としての体面・名誉に傷がつく。「与作そちが刀でくびうてば、侍は立と云もの」〔南嶺・丹波与作無間鐘・四・一〕

◆おれが孫を一所(いつしよ)に殺して侍が立つか」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・三〕

◆心中 心中だてのこと。吉野が操を守り通した事。「あながち真(まこと)を見する心中とはいひ難(がた)し」〔其磧・禁短気・二・四〕

◆相口 「匕首」と表記することが多い。鍔(つば)のない刀。「あひ口一本さゝぬ町人手向ひはいたさぬ」〔近松・大経師昔暦・下〕「朱鞘(しゆざや)の相口を出して」〔秋成・世間猿・一・三三〕

- ◆一分はたちまする 面目が立ちます。「ひとり跡にながらふる時は、衆道の一分立ち難(がた)し」(金玉ねぢぶ草・一)「そなた達の目からは、振(ふ)られたの、十日ながら撥(は)ねられたのといはれては、なにと男の一分(ぶん)が立ちませぬ」(其磧・禁短気・五・三)
- ◆人の男 「男」は夫。他の人の夫。「我が夫(おとこ)をもてなす風情」(西鶴織留・六・一)「故(もと)の人とも思はれず。夫(おとこ)見て物をもいはで潜然(さめざめ)となく」(雨月物語・浅茅が宿)
- ◆きほへ きそつて騒げ。「今迄ぐずぐず暮したかはり、チトきほふて見よふ」(仕形漸(安永二年刊))
- ◆くはつと 思い切つてはでに景気よく。「時にお鷹、こよひはくわつとおごつて一つ呑まふ」(歌舞伎・韓人漢文手管始・四)
- ◆黄なるもの 小判のこと。「姥とみえしにささやき、黄なるもの遣はされしは、かたじけなき仕合」(御前義経記・三・四)「先亭主夫婦に黄成る物をばつと下され」(風流曲三味線・四・四)
- ◆しめりけがとれて 湿っぽい気分がなくなり。
- ◆氣を通せ 氣を利かす。「女郎あつかりの紫竹(しちく)といへる人氣(き)を通(と)を)して、そなたも十九廿(はたち)になりて大かたならぬ初心と、手を取り腰を突き出だせば」(西鶴・武道伝来記・一・二)
- ◆粋な舅ぞたのもしき いわゆる草子地にあたる部分。
- ◆いやでもなし地 「なし地」は蒔絵(まきゑ)の一種。下地の漆を塗つた上に金銀の粉末をまき、その上に漆をかけて研ぎ出し、梨の実の肌(はだ)に似たような感じにまだらに仕上げたもの。それに「いやでもなし」をかけた。
- ◆ねやの盃とりぐくに、いざや飲まふよ 「菊の杯、とりどりにいざや飲まうよ」(邯鄲)による。
- ◆附 勘定書。「錢をとるにははやく来るね。如在(ぢよせへ)のねへ内だ。こう是を取つて付を持つてきさつし」(滑稽高野詣二・下)
- ◆物入 費用がかさむこと。かなりの出費。「世の外聞ばかりに、をくりむかひの駕籠、一門縁者の奢(を)り)くらべ、無用の物入かさなりて」(西鶴・永代蔵・一・五)
- ◆目を付けた チェックを入れるな。大目にみる。
- ◆阿房殿 「もとより高き雲の上、月も光は明きらけき、雲竜閣や阿房殿」(邯鄲)による。阿房殿は元來秦の始皇帝の宮殿の名で、華麗

な宮殿の形容。

- ◆いたり遊び 贅を尽くした遊び。「いたり」は「結構このうえもない。最も贅を尽した」の意の接頭語。
- ◆雲龍 前掲「雲竜閣や阿房殿」(邯鄲)による。
- ◆小めろ 小女(こをんな)。小娘。少女。「女郎三人かゝへ。はつめいな仲居小めろおきならべて。現銀見世の手まはしよく」(南嶺・教訓私儘育・四・一)
- ◆光をかざる御仕着せ物 「光を飾る装ひは」(邯鄲)による。「御仕着せ物」は遊里で女郎などに与える衣服。また、なじみの客が、相手の遊女や、出入りする茶屋の主婦や仲居などに仕送りするものもいふ。「我(われ) 四度の御仕着(しきせ)に八拾目に定(さだ)め」(西鶴・一代女・三・四)
- ◆寂光の浄土寂光の浄土喜見城もげにこの上はないはづ 「寂光の都喜見城の、楽しみもかくやと、思ふばかりの気色かな」「実此上や有りべき」(邯鄲)による。「寂光の浄土」は極楽のこと。「喜見城」は須弥山(しゆみせん)の頂にある初利天(たうりてん)の居城。七宝で飾られ、帝釈(たいしやく)天が十一万九千人の初利天女を正妃として住むという無上の遊樂世界。ともに歡樂の頂点をあらわすときの慣用的表現。
- ◆薬箱もち 往診の時、医者について薬箱を持って歩く者。下男に近い身分。「天狗ではなく薬箱持の小平六なり」(秋成・世間猿・五・二)
- ◆谷町筋 大阪の町名で、北は天満橋の南詰から、南は本町橋通りまでの、南北の道路に沿って延びていた細長い町。北より一丁目から三丁目まであり、錫屋町に連なる。行政区画としての町名ではあるが、南北に細長くその中央に道路があつたので、その道を「谷町筋」と呼んだ。東側に東町奉行所、西町奉行所、弓奉行・鉄砲奉行の役所などが並ぶ官衙街である。「昔難波の谷町筋に住ける。小間物や次郎七といふ者有り」(南嶺・今昔出世扇・四・一)
- ◆正楽寺 次節の下敷となつて狂言「釣狐(こんくわい)」にゆかりのある寺。「正楽寺は佐々木道譽が菩提所、コンクハイの狂言、白蔵主が寺也」(風俗文選・湖水賦)
- ◆眠のゆめはさめにけり 「眠りの夢は、覚めにけり」(邯鄲)による。
- ◆ゆめさめて、おきあがり見れば 「盧生は夢覚めて」「ただ惘然と起き上がりて」(邯鄲)による。

◆ 氣くたびれ 心氣の疲労。氣の疲れ。「歩み行て氣草臥れしにあも食ふと腹の減りたも住吉の浜」「仁勢物語・六八」「初旅の子よりも母の氣草臥」「柳多留・別編・中」

◆ とろとろ休み 眠気をもよおして、うつとりとなつているさま。「木枕取よせとろとろとまどろまるれば」「南嶺・忠盛祇園桜・五・三」
◆ さばかり多かりし仲居たいこ大夫が声と聞しは、となりの噂が夫婦いさかひのひどきなり。「さばかり多かりし、女御更衣の声と聞きしは、松風の音となり」「邯鄲」による。

◆ 南無三宝く、よくく思へば 「南無三宝南無三宝、よくよく思へば」「邯鄲」による。「南無三宝」の「三宝」は仏・法・僧の三つ。元來は仏語で三宝に帰依する意。一般には、突然の出来事に驚いたり失敗したりしたときに発する語。しまった、困った。「南無三宝、瓜

百すてた」「咄本・昨日は今日の物語」「藤屋伊左衛門とよぶこゑす、なむ三ぼうと逃出れば」「近松・夕霧阿波鳴門」

◆ 間短になつた夢 間短は下等な遊女。きわめて短時間に売色するところから出た名。「惣本寺の嶋原・新町・吉原より件のごとく正しからざれば、白人・呂州・茶女・臭屋・間短(けんたん)・蹴倒・夜発まで、おなじ習に移り行」「艶道通鑑・五」。ここは、「ただ邯鄲の仮の宿」「邯鄲」のもじり。

◆ 間短の、夢の世ぞと猶まよふてぞ泣かれけり 「げに有難や邯鄲の、実にありがたや邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て、望み叶へて帰りけり」「邯鄲」による。

○ 卷四之三

○ 家老の策にかゝる後悔

【梗概】

さて、播磨の方では、有馬田山が吉野大夫のことを忘れかね、なんとかものにししようと策略をめぐらしている。飾磨三郎左衛門の所にかくまわれているのを奪い返すために、吉野の伯父に伯蔵主という悪人がいることを知り、彼を仲間引き入れ、百両をやるから三郎左をゆすつて吉野をとりもどしてこいと命ずる。

伯蔵主は武士に姿を変えて三郎左の屋敷に行き、案内を乞う。武士に姿を変えてはいるが、間違ひなく伯父であるといふので、三郎左は座敷に通す。名前を尋ねられ、とつさのことなので「坊で内左衛門」と妙な名を名乗り、生国も、奥美濃と答えてしまう。そのあと、伯蔵主が「姪を帰してほしい」と言うと、三郎左は「やらす、やらす」と奥美濃方言で答える。が、伯蔵主にはそれが「やる」という意味であることがわからなかつたため、すべてウソであることを見破られてしまうが、とりあえず、夜中過ぎに粟穀野に吉野を連れて行くと言つて伯蔵主をひきとらせる。夜中になつて、伯蔵主が粟穀野にやつてくると、約束通り女乗物が置いてあつたが、なかに吉野はおらず、代りに板の書き付けがあつた。そこには、「このことを誰に頼まれたか正直に白状すれば三百両与える」とあつた。田山の約束は百両だったので、迷つた末に、三百両をもらうことに決め、もしたまされることになつても出家姿ならば命までは取られまいと墨染の衣に着替えていると、木蔭から三郎左の家来が出てきて取り押さえ、田山に頼まれたことを白状してしまふ。「三百両くれ」というと、「三百両はやるが、だまそつとした罰金として三百両を取り上げる」ということで、なんにもならなかつた。

【校訂本文】

わかれの後になく男く、後悔のなみだなるらん。

古隠居の骨長有馬入道円山は大夫が事わすれかね、藏人かたに居るうちは、さながら恥かしくおもひしかども、鰭間三郎左衛門方へ引とりしと聞き、伯父坊主に伯藏主といふ悪者ありと聞き出し、「金百両やるべし」との事にて頼まれければ、伯藏主怒に眼はなく、「このまゝで参つてはなかなか三郎左衛門をゆすりがたし」と、幸芝居をせられし時のつけ髪をかけ、大小をきめこみ、

「姪の事なれば、だましてつれきたり、ひそかにかくまはせ申すべし」

と、やすくと受合、野道をそろくと、三郎左衛門屋敷へといそぐ内にもさしつけぬ。「大小似よふたかしらぬまで」と池水に写して見て

「似よふたく。そのまゝのさむらいじや」と小歌ぶしにてゆく。むかふより、はうかぶりした男式三人行き過ぐるも、「もしや三郎左方の犬ではないか」と心づかひ、とかういふ内に、はや三郎左衛門方に着きけれ。

案内を乞い、右の通りを申し入りけるゆへ、「いかにも、伯様といふ伯父坊主はあるが、刀さいた人に覚えはなし」と、連障よりのぞいて、「いつの間に還俗なされしや」とは思へども、外聞いかんと、

「いかにも伯父御でござんす」

といふに付き、三郎左衛門座敷へ通し、

「御名は」

と問へば、急に侍とは出かけたれども、名の所まで心がつかず、行当りて当惑し、

「手前が名は御自分に御存あるはづ」

といふ。

「これは、ちかごろめいわく千万」

と問い詰められ、

「身が髪は、はへぬきでござるによつて、名も坊で内左衛門、この羽織大小も借物ではない」と、めつたに臂をはれば、

「御生国はどつてござる」

と問はれ、先程よりなまりちらしたるものゆへ、京とはいひにくき品になりて、

「奥美濃」

と答へ、

「身が姪よし野、これにあるよし。身どもに娘なればつれかへり、かゝり申したき」

といへば、三郎左衛門がてんはゆかねども、

「やらすく」

といふを、

「伯父がまいつて、姪を申し受けたいと申すに、やらすとはあまり塩もないあいさつ」

と腹をたつれば、

「イヤサ、いかにもやり申さふが、ちと子細もあれば、よし野に申しきかせては参るまじ。乗物にのせて、いつ方へぞつかはす分にて、粟敷野に棄てさせ置くべし。今夜半比に、それまで御出ありてつれ帰らる入し」

といへば、

「弥、それにちがいはござらぬか」

と、あまりうつくしうゆきたるゆへ

「さらばく、ちと美濃の養老の滝でも見物に御出でなされ。何も馳走はいたすまいが、長良川の鱒の鮓に岐阜酒で申さう」

と、よろこびいさみ帰りしあとにて、三郎左衛門あざわらひ、

「きやつ誠の武士にあらず、そのうへ美濃ものとは大のいつはり。やらすといふは美濃詞にては、やらふといふ事なるに、それをしらず、腹をたたり」

といへば、大夫は出でて、

「さてもく、さすがは御家のかためをもなさるゝほどありて、おどろき入りし御事、おち様はほん様にて京の人」

といへば、

「さこそく」

と俄にのり物一挺こしらへさせ、内へは何か手づからいれて粟穀野へ昇せすてをき、三郎左衛門はとある木陰にかくれて「坊主おそし」

とまぢ居たり。

さても、伯蔵主は時節よしと粟穀野へ心がけ出でける所に、約束のごとく女乗物すてありければ、「百両は仕てやつたもの」と戸をひらけば、大夫の事はさてをいて、小めろが一人なければ「是はどうじゃ」と見まはすに、板に書付をして中につり置きたり。よみて見れば、

「その方儀、人に頼まれ来る段は、刀をかけてゆるす間、あり様に白状してこの札をしるしに持ち来たるべし。褒美として金三百両、相違なく遣すべし」

と書き付けて、鏑間三郎左衛門名判をすへたり。「これはまた、円山殿へ頼まれたるよりは、式百両の増金、どちらに義理もなければ、頼まれし次第を、白状せうか」と札を取りにかゝりけるが、「いやく、円山殿かたの百両は握つたも同前、三郎左殿のははかりごとかもしれず」と立ちかへらんとせしが、また立ちもどり、「三百両とは、いかにしてもうまぐさい詮索。いやく、三百両といふ名題にくゝられて、命をとられふもしれず。した

が、また首尾よふいたさば、「一生の楽助となる事、コリヤ思案所じや。いなふよ戻らふよ」といろくくに心ぐるひしけるが、「いやく、たとへ三郎左衛門別心にてとがむるとも、出家とありては、よもや殺しはせまい。もとの出家姿に仕かへて参らう」と、つけ紙をとり、大小をぬぎすて上着をとれば、墨の衣になりて、かの札を取りにかゝる所を、木陰より三郎左衛門家来もろとも飛んで出で、

「その心底ならば、いかにも金子はつかはずべし。大かた頼まれたは円山殿であらふな」といへば、

「何をかくしませふぞ。円山殿より、金子百兩の約束にて頼まれてましてござる。偽り申した段は御免なされ。白状いたし申した上は、三百兩を下されませい」

といふを、

「いかにもつかはずべし」

と取つておさへ、

「刀かけてゆるすべきよし、書き付けたれば、命はたすくべし。三百兩は約束なればわたすべけれども、かたりを申し来りし科料にとりあぐれば、出入りなし。おのれがやうなやつを徘徊さすれば、何事をいたさふもしれぬゆへ、身が屋敷へつれ帰り申し付け様あり」

と、乗物へぼしこみ、家来どもにかきあげさすれば、伯蔵主はこんくわい先にたゞず、われはばけたと思へども、人の悟るを知らざりし、心の内こそかなしけれ

◆わかれの後になく男く、後悔のなみだなるらん 「別れの後に鳴く狐、別れの後に鳴く狐、こんくわいの涙なるらん」〔釣狐〕による。

◆さながら そうはいうものの。さりとて。みすみす。「我家ながら、売るに買手なく、さながら四間口、人に、無直（たゞ）もやられず」

〔西鶴・二十不孝・一・二〕

◆伯父坊主に伯蔵主といふ患者ありと聞き出し 「かれが伯父坊主に

伯蔵主と申してござるが」〔釣狐〕による。

◆つけ髪 かつら。近世では、老人や僧が遊郭に行くときなどに用いられた。「付髪（つけかみ）こしらへて芝居奴の口まねかつて仏道は外（ほか）より見るもかまはず候」〔万の文反古・五・四〕

◆大小をきめこみ 大刀小刀を差して、武士としての威儀を整え。

◆まで 文末にあつて、確認・強調の意をあらわす。中世末から近世

の口語。「ア、ほんにとこでやら落してのけた。誰(たれ)ぞ拾(ひろ)る)たか知らんまで」〔近松・心中天網島・中〕

◆小歌ぶし 三味線に合わせて歌う歌。「いつもさけのきげんにて、こうたをうたふてかへらるる。けふのふるまいにも、さだめていつものぢふんに、こうたぶしにてかへらるべし」と〔咄本・軽口はなしと(享保十二年刊)・三〕

◆はうかぶり 衣服・手拭い・布切れなどで頭から顎まで覆い、他人に顔を見られぬようにすること。ほおかぶり。「是なる下郎めは、かゝるはれいの庭なるにほうかぶりはくわんたいなり。色代せよと咎むれば」〔近松・出世景清・一〕

◆犬 間者・スパイのことだが、「彼の者が犬などを飼うておいたらばかように参ることはなるまいに、犬を飼わぬがこれが一つのとりえでござる。これはいかなこと。今遠いで犬が鳴いたを、近くで鳴くかと存じ、びっくりと致いた。これと申すも心にあやまりがあるによつて、遠いで鳴く犬の声にさえ怖ずるほどの」〔釣狐〕とあるように、化けた狐が天敵である犬をこわがるという狂言「釣狐」の趣向をきかせたもの。

◆連障 窓に方形の細長い木または竹を稜を正面にして狭い間隔に並べ、長方形の子を形作るようにして取り付けたもの。外から見通されにくく、外をのぞくに都合がよい。武家の邸の中門の廊に設け、内より外方をうかがうことをする。「やぶかうじかうじかうじて居つゞけのれんじの窓の北おもて」〔四方のあか〕「床の間やれんじをふきなよ」〔洒落本・錦之裏〕

◆還俗 僧がふたたび俗にもどること。「和尚還俗して清左衛門とあらためてより。かくれなき大身体」〔南嶺・大系図蝦夷断・四・一〕

◆行当りて 突然のことだ。

◆はへぬきでござるによつて 「つけ髪」をつけていることを気にしているあまりの言葉。

◆めつたに むやみに。「人ごとにあれこそ。例の生薬師様よと。めつたに有難がりけるゆへ」〔南嶺・今昔出世扇・一・二〕「めつたには みだりに」〔詞葉新雅〕

◆臂をはれば 虚勢を張る。「臂を張ける神主も、ちりちりにうせさりて」〔東海道名所記・六〕「山伏も図に乗つて。強ふ見せんと拳(こぶし)をにぎり臂(ひぢ)を張り。力(りき)めば」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・四〕

◆なまりちらしたる なまりの多い言葉でしゃべりちらした 「旦那

が申ついで参つたと、なまりちらかして申したりや」〔咄本・咲顔福の門(其積作、享保十七年刊)・五〕「詞は速(あつぱれ)万石取り。腰に二腰さしこなす。銀拵(ごしら)へもうさんなる。なまりちらして帰りけり」〔浄瑠璃・伽羅先代萩・四〕

◆品になつて 具合になつて。事態になつて。「こらへて下さんせ。添ふに添はれぬ品になり。わしや尼になつたはいな」〔浄瑠璃・新版歌祭文・野崎村〕

◆塩もない 愛想がない。味が無い。おもしろみがない。「人に塩かないと申ことは」〔咄本・醒睡笑・二〕「謀をしめ出しにする俵の秀郷が智略深き思案は底の湖塩のないやつこ出立」〔南嶺・忠盛祇園桜・五・三〕

◆粟穀野 不詳。地名辞典等には出ない。

◆長良川の鱗の鮓に岐阜酒 いずれも美濃を出身地としたはずみで答えたもの。

◆やらす 「行く」を「やらす」というのは、尾張・遠江の代表的方言。「尾張遠江にて、ゆかずといふは行んずる也。馬をやらす、駕籠をやらすなど道中にていふ事也。馬をやらんずる、駕籠をやらんずるなれど、訳しらざる人は笑ふこそをかしけれ」〔物類称呼・五〕

◆美濃詞 美濃でも尾張・遠江のようにこつたものか。ただし、このさかさ言葉の趣向は、すでに本書巻一の三でも「入間詞」として利用しており、二番煎じの感がある。

◆御家のかため お家を支え守つていく人。「先づ入道殿を誰とか思ふ。一門の棟梁国家のかため」〔近松・平家女護島・一〕

◆ぼん様 僧や僧形の人への敬称。坊様。「夫よりなかつは、二階に世之介を手引して、久都に取付、尤愛(いと)しらしき坊(ほん)様、此胸のつかへをさすれと」〔西鶴・一代男・七・六〕

◆女乗物 江戸時代、身分の高い女子の用いた上等の駕籠(かご)。黒漆に金蒔絵などの装飾を施した。「女乗物にも数種あり。惣黒漆に金蒔絵を最上とす。蒔絵は定紋散し、或は定文に唐草、又は唐草のみをも描之敷。予見る物多くは定紋のちらし也。棒、同制也。押縁黒に滅金の金具を打つ。右の製なる物には日覆ひ猩々緋也」〔守貞漫稿・後集三〕

◆きぬ掛松の下に新しき女乗物、誰かは捨置ける」〔西鶴諸国咄・二・一〕「女装轎子(をんなのりもの)一挺と、又一挺の十字竹輿(つちかご)を、折戸口に扛卸(かきおろ)せば」〔八犬伝・六・六一〕

◆仕てやつた うまくごまかして自分のものにした。だまし取った。

「或時は、片山陰の柴かりて、適(たま)々手にふれし銀子をしてやり、浦人の塩馴衣をはだかにして、仮にも取る分別計」(西鶴・一代男・二・一)「おなつ女郎と清十郎がぬすみ出したぶんにして、してやるやうなぐめんがなと分別すれど、あたはぬち多」(近松・五十年忌歌念仏・中)

◆その方儀 手紙や文書などで相手をさすときの形式張った表現。「其方儀、元手を失ひ、大分金など借りたときいた」(咄本・鹿の巻筆)「其方儀心ていなをり候よしきこへ候」(洒落本・錦之裏)

◆段 引用文を受けてそれに体言の資格を与える形式名詞。こと。とき。書簡文などに多く用いる。「亭主が胸に応(こた)へ欲の段は退(の)けて」(其磧・禁短氣・三・三)

◆増金 割り増し金。「日増の大入に前々日よりいひ込でもさんじきはなく、直段(ねだん)増金(ましきん)なけねば手にいらぬ近年にない大繁昌」(歌舞伎・錦画姿・下)

◆握つた 自分のものにしたのと「埒の明ぬ振手形を銀の替りに握(にぎ)りて、年を取ける」(西鶴・胸算用・一・一)

◆うまくさい うまそうな 「アレ見さつしやれ、旨臭(うまくさ)い船では無いが、如何様雌(めん)ばつかりの遊山船」(浄瑠璃・道中亀山嘶・一)

◆名題 名目。名前。「此嵯峨の下屋敷へ。茸狩といふを名題にして。やかたを出野遊にことよせ」(其磧・風流宇治頼政・四・二)

◆楽助 のんきに暮しを送る者を、人名に擬している語。「扱もかる

き身体、外より見てのくるしみ、内証の楽介(らくすけ)各別ぞかし」(西鶴織留・二・四)

◆かたり だますこと。詐欺。「或はかたり、鳩のかひ、追剥押入ごまのはひのねだれ取」(近松・娥歌かるた・五)「世の中の女郎買ひの騙(かた)りと云ふはこの客連(づら)が事でござる」(其磧・禁短氣・五・三)

◆科料 近世の刑罰の一で、罪を金銭で償わせること。將軍吉宗が始めた制度。「七拾五ヶ邸の名主役取上られ、組頭は五貫文づゝ過料なり」(狐塚千本鎗)「うちが国(くに)さあじやア、から取違(とりちげ)へても過料(かれう)のヲつん出すものを」(洒落本・世説新語茶)

◆ぼしこみ 押し込み。ぶちこみ。

◆こんくわい先にたゝず 「後悔先に立たず」のもじり。「こんくわい」はきつね。その鳴き声に基づく呼び名。また、狂言「釣狐」の別名(驚流および『狂言記』ではこの称を用いる)でもある。「あのやうなきつい目にあふなら火を付まい物と、いまはこんくわいにあるといはれた」(咄本・軽口ひやう金房(元禄頃刊))「卦(け)は坤(こん)の卦、坤なこんくわい、俗に申す狐(けつね)、則狐福(けつねぶく)と申て」(膝栗毛・八・中)

勸進能舞台 五之卷

目録

乱

第一 我女房に孝あるによつて

珊瑚珠の接様をさづかりても

御褒美をくれぬこそ断やしら化のおやぢ

第二 御家の宝只今返しあたふるなり

蔵人が心直なる事竹の葉の

さかさま異見円山が身の果

第三 有難やこの国にふたりの美女

毎日の酒宴にあしもとはよろくと

しても金の泉は涌き出づる繁昌

◆乱 能楽用語で、「驚」と「狸々」だけにある特殊な演出の舞。笛を主調として大小の太鼓ではやす緩急変化の激しい難曲。また、能「狸々」そのものをさすこともあり、ここはその用法。以下、曲名としては「狸々」を用いる。謡曲の「狸々」は五番目物で、世阿弥作。唐土の金山（かねきんざん）の麓、揚子の里に住む孝子高風（ワキ）が、霊夢により市で酒を商い、富貴の身となる。市ごとに来る者があり、いくら盃の数を重ねても顔の色が変わらないので名を尋ねると、海中に棲む狸々だと答える。そして、高風の人柄をめで、無尽蔵の酒壺を授けるといふ内容。現行曲中最短編であるが、めでたい内容なので、最後の巻に用いるにはふさわしい。なお、この巻には、狂言は用いられていない。

◆我女房に孝あるによつて 「さてもわれ親に孝あるにより」〔狸々〕による。

◆しら化 弱点などをわざとあかして、率直らしく誠実らしく見せること。すぐばけ。「直化（すぐばけ）実事（じつじ）にはあらず是は

○巻五之一

○我女房に孝あるによつて

【梗概】

有馬藏人の屋敷に京都西陣の香具屋で風来というものが訪ねてくる。広間で話を聞くと、割れた皿を接目のみえないように修繕する秘伝を知っているという。人払いをして詳しい話を聞くことになり、風来がふところから秘伝の書付を出そうとするやいなや藏人はすぐにとつておさえ、家来の新三郎に縄で縛らせて奥に連れて行かせる。そこへ隠居の円山がやってきて、早く京に行つて継目の参内をすませてしまえ、とせかせる。かつまた、お家重代の宝である珊瑚珠の皿についても、京都の細工人風来という者に偽物を作らせてあり、三郎左衛門のところにあつて割れたと言われているのはそちらの方であること、本物は自分のところにあることまでも明かし、紫のふくさの中から本当の皿を出して見せる。驚きながら藏人は、「そこまでの計略を立てていながら、なにゆえ吉野に迷つたのか」と聞くと、円山は、友仲をおびきよせるための方便であると言いつたが、「ではなぜ明石貫左衛門を斬り捨てたのか」と迫られ、最初ははかりごとであつたが、いまは本気になつ

手だての内にていひまはさずありのまゝにいひてきかしむる謀也。白化（しらばけ）…直化（すぐばけ）と同じ「色道大鏡・一」「只白化（しらばけ）に…辻談義も仏のまねの口をあき、つまる所は喰はねばひだるいひだるいといふにぞ、ありのままなる法師とて人皆勸進をとらせける」〔西鶴織留・一・二〕

◆只今返しあたふるなり 「只今返しあたふるなり」〔狸々〕による。

◆心直なる事 「心素直なるにより」〔狸々〕による。

◆竹の葉の 「竹の葉の酒」〔狸々〕による。なお、竹はしばしば真つすぐなものにたとえられる。「竹ほど直（すぐ）なる、物はなけれど」〔隆達小歌集〕

◆さかさま異見 子が親に意見すること。前項「竹の葉の酒」から「さかさま」と続けたもの。

◆あしもとはよろくと 「足もとはよろよると」〔狸々〕による。

◆金の泉は 「泉はそのまま、尽きせぬ」〔狸々〕をふまえるか。

てしまつたのだと告白する。そして、「いずれにしても、早くこの皿を持つて参内せよ」と言いつつ宝の皿を蔵人に渡した。それを受け取るや、合図の太鼓が鳴り、住吉左京大夫とその娘姫和歌の前、赤松家の若殿友仲、家老加古川右近・鎧間三郎左衛門が蔵人の後見役生田新三郎に先導されて入ってきた。

【校訂本文】

「これは、もうこしではなけれども、かねきんを織る西陣に、香具屋の風来と申す商人にて候ふ。われ妻に孝あるにより、不思議の夢を見たるにまかせ、有馬蔵人殿へいそぐ」

といふて、取次をもつて目見えをねがへば、蔵人は日夜のおごり、身の程をわすれ、「大酒の上の手討、大盃を持つて杓取りそへ、老せぬやくすりの名をも菊の水、盃も浮み出でて思ひよらぬ大名となるぞうれしき」

と座に付かるれば、「一家中うやまひかしく末座へ、くだんの風来を召し出せば、

「おそれながら、私義は香具屋で御ざりまするが、殿様へひそかに申し上げたき事これあり、まかりこしたり。その子細と申すは、うすくうけたまはれば、『御家の重宝玉の皿われ申したる』と、どこともなしに噂御座候。それにつき、ふしぎなる霊夢をかうふり、その皿を接石うるしを致し覚へ、ひとつもつぎめの見へざるやうにいたす口伝を申し上げたく参上いたしたり。大切の義なれば、このつき様は人ばらいをなされて、ひそかに御きんも下さるへしや」

といへば、蔵人その意得ずながらも、

「神妙く、褒美は望に任すべし。皆くつきへ立て」

と、一間をたてこめ、

「シテ、その方は」

と近よれば、件の商人懐中より書付を出だせば、蔵人読みも終らずかいぐらつて取つておさへ、

「人やある」

とよぶに、家の子新三郎つとまいれば、

「繩持つて参れ」

と、高小手にいましめさるぐつわかくる。

「御隠居田山様の御入」の義、くだんの繩つきはおくへひかせ、藏人いで向へば、田山上座になをり、

「わか殿友仲国遠あつて日数もあれば、はやく上京あつて継目の御札申しあげられ然るべし」

と、悪人ながらも子をおもふ心の闇に迷ひ、そのうへ人を遠のけ、

「今までは深くかくして申しきかさなんだ。そちもしる通り友仲父は身が為には兄、身が事は知行一万石をわけて有馬をあておこない置かれたれども、不断兄友成が側にありしが、兄友成が病中に家の重宝なれば折棒ともなるべしと、三郎左衛門かたにこれある玉の皿を取りよせ、いたゞき申されたる時より、何とぞあの皿をぬすみをき、その方にゆづり、この家国をとらせたく思ひ付きし故、京都より玉細工人風来といふ者をよびよせ、緒々珊瑚珠を数千くだかせ、つぎめ見へぬ様に仕立させて似せをこしらへ、取りかへをくともしらず、友成殿病氣つひのりし時、手づから似せ物ともしらず、三郎左衛門へわたし給ひて、あへなくなられしゆへ、三郎左衛門この騒動に取りまされ、まことの皿と心得、大切に預れども、根がつぎ物ゆへ、腰元の女が碎きたるとの義、さもあるべし。しかれども念を入りて見とゞけしは、三郎左衛門めに気をつけさせまじきため、おもてむき詮議をつよくせぬも、真の皿はこの方にある故なり、早くこれをもつて上京し、一國を手に入らるべし」

と、錦のふくさより真の皿をいださるれば、藏人ははじめておどろき、

「扱く父の御計略かんじ奉りたり。左程のふかき御心にて、何とて吉野風情が色にはまよはせ給ふ」

と、いへば

「されば、もろこし湯陽の江には狸々といふけだものあり。狸人これをとらんとするには、壺に酒をたゝへ、盃杓をそへおけば、はたして酔い

たる所をとらるゝとは知りながら、この酒に心みだれ、つみにかりうどの手にいるよし。友仲をつりよせてうたん為に吉野を寵愛と、ばつと沙汰をさする思案、まったく色にはまよはぬく」

といへども、

「いやく、その分ではすまぬ事がござりまする。明石貫左衛門が吉野に深ひと御聞なされて、うつてすてられし御心はいかに」と問はれ、

「サアそれは」

「サアそれは、どうで御ざりまするぞ」

と問ひ詰められ、

「あり様は、初のほどは、はかりことであつたれども、見るにまし、思ふにまして、命かけて忘れぬやうになつた故の情気じや。よしない詮議せずとも、親がこの憂き苦勞して、ぬすみ置いたる皿を持つて上京せよ。大名の御隠居ともいはる身が契情一人手にいれずにはをくまい」

といへば、

「しかれば、モウその外に仰せらるゝ事はござらぬの」

と、言葉に釘さし、宝の皿を請け取り、かけをきたる相図の太鼓をたゞけば、住吉左京大夫おなじく姫和歌の前、赤松の若殿友仲を始め、家老加古川右近鋳間三郎左衛門、上下いため付きて、蔵人おとな役、生田新三郎さきに立つて、千秋万歳を諷ひつれく座敷へ出にけり

◆我女房に孝あるによつて 「さてもわれ親に孝あるにより」「狸々」による。

◆これは、もろこしではなけれども、かねきんを織る 「是は唐土かね金山の麓、楊子の里に住まゐする高風と申者にて候」「狸々」による。「かね金山」は同音異字の「徑山(＝コミチキンザン)」と区別するための慣用的な呼び方。単に「金山」とする本文も多いが、本注

釈では、この箇所を「かね金山」とする『謡曲百番』本文による。「いやや文蔵が先祖は、唐土(もろこし)看経山(かねきんざん)の麓楊子(やうす)の里にて」「好色万金丹・一・二」

◆かねきんを織る西陣 ポルトガル語 *canquina* より生じた語。固くよつた綿糸で、目を固く細かく織つた薄地の布。白足袋、箆司(たんす)の内敷、その他衣料として広く用いられる。「幅三尺より四尺五尺ま

でも段々有。丈五丈位より七八丈拾丈までもあり。白なり。地合うつ
くしく糊づや光有て、尤染付よろし」〔万金産業袋・四〕

◆香具屋 名香や香道具を売る店。「一度も焼(たい)ては聞(き)か
ず、もらひ溜(た)めて近所の香具屋へ安く売て」〔其磧・禁短氣
・一・二〕「香具やに間夫(まぶ)があると廊中へしれたら」〔秋成
・世間猿・四・三〕

◆風来 「猩々」では高風。

◆われ妻に孝あるにより不思議の夢を見たるにまかせ 「さてもわれ
親に孝あるにより、ある夜不思議の夢を見る」〔猩々〕による。

◆老せぬやくすりの名をも菊の水、盃も浮み出でて 「老ひせぬや、
薬の名をも菊の水、さかづきも浮かび出て」〔猩々〕による。

◆霊夢 神仏の告げが現れる不思議な夢。「暫まどろむ枕の上に、あ
らたなる霊夢をかうふる」〔咄本・新竹斎〕

◆石うるし 漆の木の枝からかき取ったままで精製しない液。せしめ
うるし。粘りが強く、上質で、石や器具などの破損したものの修理に
用いる。「凡そ木器、磁器の破(やれ)たる者は、漆を以てこれを接
継す。則ち離るべからず。復びこれを離さんと欲する者は、蕎麦ガラ
の灰汁の中へ投浸れば、其器則ち離るべし」〔和漢三才図会・八三〕
「ひつたりだきつかしやんすやいなや。とんとすいついてはなれぬ股
ぐらのあはび石うるし石うるし。内裏(だいり)様御はんじやうの吉
左右」〔浦島年代記・二〕「くつついて痛がる物なら狼の生れがはり
だらう。取付て離ねへなら狐さま。引付て離ねへなら石漆(いしうる
し)」〔浮世風呂・三・下〕

◆子をおもふ心の闇に迷ひ 「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ
道に惑ひぬるかな」〔後撰集・一一〇三・藤原兼輔〕による。子を愛
するあまり、親が思慮分別を失うこと。子に迷う闇。子を思ふ心の闇。
子の道の闇などいろいろの言い方をする。「大いなるかな。親愛切
たり親たりといへり。塩やき藤太が母は。子を思ふ心の闇にかきくれ。
お濱にあひたふござりますといへば」〔南嶺・魁對盃・五・一〕
◆あておこない置かれたれども 領地を割り当てておいたが。「御墨
付粉(まぎ)れなく、何々の郡を充行(あておこなは)る」〔庭鐘

・繁野話・四〕「さるによつて忠義の武士に充行(あておこな)ふ知
行も」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・二〕

◆玉細工人 いろいろの玉や石を材料にして細工する人。

◆緒々 名袋や印籠(いんろう)などの口を締める紐に付ける具。球
形、その他の形があり、うがつた孔に紐を通し、これを袋のほうへ動
かせば口が締る。装飾をも兼ね、玉石・金属・象牙(ざうげ)・珊瑚(さ
んご)・蜻蛉玉(とんぼだま)・種子の皮殻など種々の材を用い、彫刻、
象嵌(ざうがん)などを施したものである。「さんごじゆのをしめを
さげ、何とぞして、是を人にひけらかしたいと思ひ」〔咄本・私可多
咄・二〕「珊瑚：枝玉といふは枝の形ながら、すぐにひも通しをぬき
て緒じめにす」〔万金産業袋・三〕「又淡青色の硝子にて、をじめの
如き者をこしらへ桜花の画あるあり、俗にくすり玉と云」〔重訂本
草綱目啓蒙・四〕

◆されば、もろこし湯陽の江には猩々といふけだものあり。獵人これ
をとらんとするには、壺に酒をたゝへ、盃杓をそへおけば、はたして
酔いたる所をとらるとは知りながら、この酒に心みだれ、つゐにか
りうどの手にいるよし この説話は謡曲「猩々」とは別の中国の猩々
伝説による。「猩々は……性酒を嗜む。人これをとらへんために、路
側に酒と腰とを設く。初めは我れを槍にする謀をしれども、嗜みの甚
だしき遂に指を嚙に染むること数度に及び、大酔の餘り腰をさげて舞
ひ戯れ、遂に術中に陥りて擒となると見えれば、嗜むこと甚だしき
はしるべし」〔古今要覧稿・六〕

◆悋氣 嫉妬(しつと)すること。「さらさらせまじき物は悋氣(り
んき)、是(これ)女のたしなむべきひとつなり」〔西鶴・一代女・
三・二〕

◆上下いため付きて 上下をつけ、頭髮をきちんと整えた、いかめし
い身なりをして。「むかし伽羅の油にいたため付たる頭も、白き烏丸
通に」〔浮世親仁形氣・二・二〕「軍蔵は上下いたため付て。いんぎ
ん成亭主ぶり」〔南嶺・花擲巖流島・一・三〕

○御家の宝只今返しあたるなり

【梗概】

蔵人は友仲との再会を喜びつつ、これまでの経過を語る。それによれば、すべては、友仲に無事跡継ぎをさせるためであり、そのためには、父円山から本物の皿のありかを聞き出さねばならない。皿が割れたとうわさをはじめすべては、そのための計略であった。右近や三郎左も最初のうちは私の本心を疑っていたが、円山の一味に加わっていないことがわかってからのこ二十日ほどは腹を割って相談してきた、というのであった。すべては円山の悪心から起こったことが明らかになったので、右近は、こうなつた以上腹を切るしかないだろうと円山に迫る。円山も覚悟して、友仲の手にかかつて切腹したいと願ひ出たが、「自分の父親に切腹させるわけにはいかない、代りに」と蔵人が名乗り出ると、円山が宝の皿を奪ひ取って、「親の心子知らずとはこのこと。せつかく切腹とあざむいて友仲を切ろうとしていたのに。もうこうなつては、自分に刃向かうとこの皿をみじんにくだくぞ」とおどす。皆々困つているところに蔵人が出て、「わかつた。では、自分は父に一味し、左京大夫と友仲はだまし討ちにいたします」と言いつつ、さきほどから奥に縄で縛つてあつた風来を呼び出す。彼は、「にせ皿の代金をなかなかくれないので、偽の皿を二枚作り、本物は自分のところにある」と告白する。くやしがる円山から右近が皿を奪ひ取つたのを見とどけたうえ蔵人は、「でかした、でかした。偽物を一枚というのは、いま思いついた計略。父上、お覚悟」と言いつつ、円山の腹に刀を突き刺す。円山は息が絶えるが、その直後、蔵人も親を手にかけたうえは生きていられないと、自らの腹に刀を突き刺した。皆は、あつぱれなその最期に感じ入るばかりであつた。

【校訂本文】

蔵人はひざたてなをし、

「久々にてこの友仲殿にあふぞうれしき、この友仲殿、御国遠と聞くやいなや、有馬より罷り帰り、様子を聞けば、なさけなや、親人のゆへとある。南無三宝と思ひしかども、諸家中の心底もはかりがたしと、白紙に連判させ、一人くためし見て、判形のうへの誓紙の文は若殿を尋ね出だし、家國を継がせんとの一通、兼て左京大夫様へも写しをのぼしたれば、まれ人も御らんずらん。月星とくまなくみかく蔵人がたましひ、これおち様三郎左衛

門へ御わたしなされたるは、似せ物といふ事、三郎左衛門合点なれども、大殿御死去のみぎり、ちきに御渡しなされれば、詮議もなりがたく、わざとくだけたとの披露は、事をのぼし、その間に真の皿を詮議し、出ださんとの深き思案。うたがひふかき親人のころを計り、井筒より幽霊の出てり沙汰に皿を破つたるにちがひなきしるしを見せ、『似せの皿をもつて継目をすまし給へ』といふに、『にせ物にてすまず料簡何ともがてんゆかず。似せ物を請け取りて、それなりにすまずべきはずはなひが、さては真の皿は円山殿かたにかくし置かれたるゆへに、せかれぬよな』と、それよりこの蔵人までをうたがひ、三郎左衛門右近が様々の計略、身が心の親とひとつでない所を見とぞけ、廿日ほどこのかたは打わたつての相談、親の悪を子があらはす事、孔子の教にもはづれ、孝道にもそむかなしさに、この家国にはかへられぬゆへでござれば、向後御心を改めらるべし』といへば、三郎左衛門も、

「只今蔵人殿の仰せらるゝ通り、御手前様に真の皿はありと見付けし故、だんくのはかりことをもつて、不便や、科もない井戸堀までをころして、手づよく拙者がにせ物をくうて、真の皿と思ひこんであるていを見せましたも、今日といふ今日、こなたの白状を聞き、あの真の皿を別条なく出させうばかりでござつた。何と右近さうではないか」といへば、

「いかにもく、京都へ人を上せ。後日の証拠のため、住吉様をよびください、友仲様を難波よりひそかによびかへし、すなはちいひ名づけの御姫様をみつゝくにむかへとりて、蔵人殿と心をあはせまかりありしに、皿が手に入るからは、浮世に用のないお身、御子息蔵人殿の誠ある志に免じ、罪におこなふべき所なれども、いさぎよく切腹〜」とおつとりまはして、つめ腹きらさんとぎしめけば、三郎左衛門は、

「むかしが今に至るまで、若殿の契情ぐるひを中へ入れた騒動に、系図の一卷か宝の一品のないはまれなり。さしづめ子ゆへのまよひなれば、実悪といふ中にも、近年藤川武左衛門以後、老人悪のまれものもなければ、切腹でお仕廻なされるれば、黒の上々吉まではおうけ合申す」と、ちかきたとへを取つてのがさぬ躰、さしもの円山ほつきりと悪心折れ、

「あやまつたく、何も外にいふ事はない。サア友仲の手にかゝりたいよつて首うたれよ」

と、おしなをらるれば、蔵人は涙をつゝみ、

「若殿へ申します。いとことは申しながら、さしあたつて、本家の御自分様親が悪心不届にはおぼされんか。これまでに心をつくしたるこの蔵人に、御心をゆるされ、親田山一命は御助下さるべし。そのかほりに、蔵人切腹仕つらん」

と、持ちたる皿を下に置き、腰刀に手をかくる間に、田山とびかゝつて皿をばいとり、

「エ、親の心子しらすじや。サアその方を世にたてんと数年の工夫。身があやまつた首うたれんとはいつはり。友仲がよる所をぶちころしてしまふ分別。蔵人の不孝者め。もはや親子の縁もこれまで。くたばりたくは、くたばれど、いつでも身に刃むかは、この皿をたつた今みぢんにくだくが」

と、左にかひこみ、

「サア大夫を心が心に任せ、一国は身が物とあがむるか。何とく」

といへば、皿を質にとられしにはこまり、手を出しかねて、皆く見あはず所に、蔵人しさつて

「ア、おやち様、はやまり給ふな。おまへの悪心のすわつた所を見とけふ為でござつた。また、左京大夫友仲はだまし討と存じ、はかりよせましてござる。こなたにあはずものがある」

と奥へかけいり、しばらくして、さいぜんの縄付をひきたて出づれば、田山見て、

「ヤアその方は先年玉の皿をすりかへし時の細工人よな。その方かたへ礼物おそなはるとて、たびくの催促、さては世倅かたへ願ひに出たをとらへられたるか」

といへば、蔵人、

「にくいやつは、この玉細工人でござります。こなたの仰せ付けられて、玉のさらを似せさつしやる時、真の皿はきやつがぬすみ、武枚ながら似せものをこなたへわたし置いたとの注進。御礼物延引も、にせ物と御心のつきしゆへと存ずれば、ちか頃恐れいりたれども、すりかへ置きたる真の皿

をさし上ぐべし。金子を千両くれよとの書付をもち来りしゆへ、からめ置きしといへば、かの商人さるぐつわはませられながら、たゞ辞儀する外ぞなき。

田山、もちたる皿を下にをき、

「さてくにくきしわび」

と繩付のもとへよる内に、右近かけより、玉の皿を引きたくれば、蔵人は、

「できたく、こいつは細工料延引の願いに出でた分。似せ物をくはしたとは、当座の計略。親者人、もうのがれませぬ」

と、よるかと見へしが、刀抜き持ち、親田山がどうばらへつゝこめば、つかれながら蔵人が髻をつかみ、

「よし家国はともかくも、思ひかけし吉野が事、死ぬる今はも忘れぬ」

と苦しむを、一急ぐり刀を抜けば、息絶へたり。かへす刀に我脇つぼ左より右へ引きまはせば、親を手にかけとめたりとも、いきて居べき道ならば、皆く惜しむぞ道理なる。

立腹切つたる蔵人が足もとはよろくと、よはりふしたる夢の世界。あつはれ義あり節ありく、各感じ入りにける

◆この友仲殿にあふぞうれしき 「此友に逢ふぞ嬉しき」〔狸々〕による。

◆親人 親のこと。「梶原源太懐中より封じ文を取出し。親人平三殿のお文でござります」〔南嶺・魁對盃・一・二〕

◆ためし見て 實際に使つてみて。こころみて。「かかる切れもの彌々ためし見たきとて主人屋敷にて様(ため)しものありし節」〔耳袋〕

◆判形 書き判、また、印形(いんぎょう)。「相果し源十郎が筆判形ともに疑ひなし」〔近松・五十年忌歌念仏〕

◆まれ人も御らんずらん。月星とくまなく 「客人も御覧ずらん 月星は隈もなし」〔狸々〕による。

◆みがく かがやかす。光を添える。「月に瑩(みが)ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路」〔太平記・五・大塔宮熊野〕

落

◆せかれぬよな 急いではいけない。「せく」は「あわてる、狼狽する」の意。「其日のお敵権七様御出と呼つぎぬ、すこしもせかず、火燵の下へ隠れけるこそ」〔西鶴・一代男〕「アアせくまいせくまい早う早うと女がいさむをちからぐさ」〔近松・心中天の網島〕

◆だんくの 次から次へと。いろいろの。「身にあやまりあればこそ、だんだんのわびこと」〔近松・心中天の網島〕「戸塚の宿にて万屋(ばんおく)が行脚よりのかへりに出あい、だんだんの物語をする」〔黄表紙・高慢齊行脚日記〕

◆手づよく 気強く。きびしく。「放せ放せとあせれ共、こなたは手強き忠義の一箇」〔浄瑠璃・神靈矢口渡〕

◆にせ物をくうて にせ物をつかまされて。「くう」は、(好ましく

ないことを) 身に受けるの意。「生血をとる、こちへおこせとは法を知らぬ雑言、権威をくふ男でなし」〔浄瑠璃・浦島年代記〕

◆みつ／＼に ひそかに。「禁裏へも伝奏の御方へ、密々(みつ／＼)に此旨仰遣はされしかば」〔和漢乗合船・一〕「わかい者では名が立つとて、みつ／＼お心にしたがふたゆへ」〔南嶺・大系図蝦夷断・四・一〕

◆おつとりまはして しつかりと捕まえて。「十人ばかりむらむらと、てん手にわり木ひっさげひっさげ、追取廻す」〔浄瑠璃・傾城酒呑童子〕

◆つめ腹きらさんと 責任を取らせるために、いやおうなしに切腹させようと。「急ぎつめ腹きらするか、但しひそかにさし殺すか」〔近松・姫山姥・三〕

◆ぎしめけば りきめば。勢いづけば。「聞よりはやくかけ出、かものか宿を、両どなりへ理り、めいわくさせんなどぎしめくを、人々やうやうにとどめ給ふを」〔是樂物語〕「某をちくしやうとはすいさん也とそりをうってぎしめけば」〔浄瑠璃・当麻中将姫〕

◆実悪 歌舞伎の役柄で、敵役のうち、残忍で意志強く、後悔や愛心するなく、終始一貫悪役に徹底する役。「伽羅先代萩」の仁木弾正、「繪本太閤記」の武智光秀などがその代表。「今少身のとりまはしにりかうあらは、じつ悪のつめひらき和合してにくらしき風俗」〔評判記・野郎にぎりこぶし〕「実悪といへること、染川十郎兵衛といふ人、其身実事仕にて、初て山椒太夫の三郎の役をしけるより実悪といふ」〔歌舞伎事始〕「扱悪方にも五等ありて実悪、色悪、実敵、半道、平敵と領(わか)つ也、実悪を先第一として、此内にも鉢用真飯の二ツ自然と領れて、鉢真の実悪とは一体少しもそそけず、位重の所を専らとして謀叛人似勅使(にせちよくし)杯やうの大敵を勤るをいふ」〔劇場一観頭微鏡〕

◆藤川武左衛門 元禄期の京都で活躍した実悪の名優。享保十四年没。「暮れて行くとし浪の心よく、名残の芝居見て、大和屋甚兵衛・宇治右衛門・藤川武左衛門・坊主百兵衛などひとつに」〔西鶴・名残の友・五・五〕「曹操王莽のあく人方は藤川武左衛門でなければと」〔秋成・世間猿・四・二〕

◆まれもの たぐいまれな人。傑出した人物。「天晴(あつぱれ)天下の稀者(まれもの)やと、扱褒めぬものこそなかりけれ」〔浄瑠璃・頼光跡目論・二〕「色道まれもの寄つたこそ幸」〔西鶴・一代男・六・二〕

◆お仕廻なされるれば 終わりにすれば。「しまう」は「やり終える、しどげる、しすます」の意。「追付、勘当帳に付てしまふべし」〔西鶴・五人女・一・一〕

◆黒の上々吉 歌舞伎評判記では、「上」「上上」「上上吉」「大上上吉」「真上上吉」「極上上吉」などの評語を用いるが、白抜きの「上」「吉」などに対して、黒の「上」「吉」などを用いて、白抜きより上位を表した。これによる表現で、できばえがこの上もなくよいことを表す。「上上黒吉」なども。「やうやうからき命をたすかり、黒極上々吉飛切の、めでたき御代こそありがたき」〔黄表紙・孔子縮干時藍染〕「故に評書に上上黒吉と成」〔秀鶴草子〕「此両役も古代は名人ありて、既に中古沢村源次郎などは花車形にて黒の上上吉に至りし也」〔劇場一観頭微鏡・親仁形花車形之説〕

◆ほつきり 堅く持っていた意志などがくじけるさま。「きぶい人ぢやが、ほつきとをるゝ人也」〔史記抄・季布欒布伝〕「盗人のぼつきとおれし初一念」〔俳諧けい・一一〕

◆あやまつたあやまつた 降参したときに発する語。まいったまいった。「いかにもさふじや。あやまつたあやまつた。機嫌を直したも」〔近松・傾城王生大念仏〕「兄弟なればこそ異見もいふ。あやまつたあやまつた、あやまつたはやい」〔歌舞伎・助六〕「金はわきものとはよく云つたものだ、かう湧れてはあやまるく」〔孔子縮干時藍染〕

◆をしなをらるれば 「おし」は接頭語。正しく座に着くと。覚悟して座に治ると。「そのとき、さだみつおしなをって申あぐる」〔浄瑠璃・源平武將論〕

◆腰刀 腰に差す、つばのない短い刀、栗形に折金をつけ、幅子(そえご)として筭(こうがい)や小柄をつけることが多い、赤木柄、鞘巻など各種ある。「はかまかたぎぬ腰刀にいたるまではなやかに出で立ちて打ちすぎ給ふ」〔玉櫛筒・四〕

◆ばいとり 奪い取り。「夫婦此御所へ入込しは、帝を奪(ばひ)取る為ならずや」〔浄瑠璃・源平布引滝〕

◆ぶちころしてしまふ 打ち殺してしまふ。たたいて殺す。なぐり殺す。「そいつ共にぶちころせ」〔近松・用明天皇職人鑑〕

◆かひこみ 手元に引き寄せてかかえこみ。脇の下へかかえこみ。「星切斑(きりふ)のとがり矢かいこみで大床(ゆか)に踊出給へば」〔近松・平家女護島〕

◆しきって うしろへ下がって。「太刀の柄に手をかくれば、景清しきって刀を捨て」〔近松・出世景清・五〕「御名に恐れとびしきって」

うづくまれば」〔南嶺・龍都俵系図・二・二〕

◆礼物 感謝の気持ちを表すために贈る金銭・物品。「れいもつは大
方三十兩、何時でも受取」〔近松・女殺油地獄〕

◆おそなはる おそくなる。遅れる。「最早皆々御入とや。遅なはり
し残念と」〔浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・三〕

◆世倅 せがれ。息子。「二つにたらぬ世倅何を以て証拠といふ」〔新
色五巻書・五・五〕

◆注進 事件を急いで報告すること。「注」は書くの意。「兄方へ帰
て、実否をさぐり注進いたし候べしと、つかへなでおろしていへば」

〔南嶺・忠盛祇園桜・一・三〕

◆さるぐつわはませ 「さる」は、戸締りの道具（戸の上部に差し込
むものを上猿（あげざる）、下の框（かまち）に差し込むものを落猿
（おとしざる）、横に差し込むものを横猿という。「くつわ」は馬の
口に付ける具。人に声を立てさせないように、布片などを、口の中に
押し込めたり口にかませて後頭部にくくりつけ。「さがし出す度びの
び上るさるぐつわ」〔柳多留・五〕「渦丸は中途に埋伏（まちぶせ）
して、矢庭に朝稚を縛（いまし）め、口には猿轡（さるぐつわ）とい
ふものを銜（はま）して」〔弓張月・後・二九〕

◆できたできた でかした。物事をりっぱにやりとげた。うまくやっ
た。みごとにやりおさせた。でかした。「酒肴とかいてあるをね酒又
有とよまれて、出来た、おやまありとはかかれぬにより」〔咄本・軽
口御前男〕「死骸をふまへ突つ立ば雑式を始として、元信其外弟等出
来た出来た、あつばれあつばれ御分別後覚也といさみをなす」〔近松
・傾城反魂香〕

◆親者人 親のこと。「親のとふらひとて、神子を請し口よする時に、

○卷五之三

○有難やこの国にふたりの美女

神子いふ。親者人は、ふなになり水にあそぶぞ」〔醒睡笑・二〕

◆どうばら 腹部をののしつていう語。どてっばら。「亭主め、ふん
ばりめらを皆なここへつれて来い。胴腹へ細引をとうして、五丁町の
まんなかで、女郎の百万遍をくるぞ」〔歌舞伎・助六〕

◆脇つぼ 脇の下のくぼみ。わきの下。「まっ此通。仕課せよと脇つ
ぼぐつとつらぬいたり」〔浄瑠璃集・鎌倉三代記〕

◆皆く惜しむぞ道理なる いわゆる草子地にあたる部分。

◆立腹 立ったままでする切腹。戦場や争乱の場などで、介錯人なし
に行うもの。「大門口で立腹切り、新造衆や禿共、芝居でするやうな
事して見せふ」〔近松・傾城反魂香〕「立腹（たちはら）切つてのつ
けにそれば、亡八（くつわ）が内はくれなぬの川」〔御前義経記・七
・一〕

◆足もととはよろよろと、よりはりふしたる夢の世界 「あしもとはよろ
よると、よりはり臥したる、枕の夢の」〔狸々〕による。

◆義 五常（仁・義・礼・智・信）の一つで、他人に対して守るべき
正しい道。物事の道理になつたこと。「（訳）謙虚さ、節制、節度
を保もつことの類で、支那および日本の為政の拠り所となる五つの規
範の一つ」〔日葡辞書〕「父としては慈を施し、子としては孝を勉め、
夫は義を守り（略）五常とは名づくるものなり」〔浮世物語・四・三〕

◆節 自己の信ずる考え、志、行動などを貫き通して変えないこと。
みさお。節操。節義。「すべて忠臣・孝子・貞婦とて名に高きは、
必不幸つみつみて、節に死するなり」〔胆大小心録・一五五〕

◆感じ入りにける 感心した。「及ばずながら感じ入りました」〔秋成
・妾形氣・一・一〕

【梗概】

播磨の国赤松家では、悪人が退治され、友仲がもとどおり国主におさまった。住吉左京大夫の娘を本妻として祝言も終わり、継目の参内もすませた。吉野も側室として、月の前半は本妻のところ、後半は吉野のところ、というふうにして丸くおさまった。

ところが、三郎左衛門から、「吉野・藤の兩人にとつて、私は兄の敵になるから、兩人に討たれなければならぬ」という訴状が出された。友仲が取り上げてくれないと切腹するというので、やむなく敵討ちをさせることになった。しかし、吉野は、「今日こうしてあるのはすべて三郎左のおかげなので、どうして斬ることができませんよ」という。そこで、右近に相談したところ、家中の古くからの侍一八三人が連判を集め、日雇いの井戸掘りを殺したのはすべてお家のため、そんなことで罪にはしないという願いが出てきた。こうなつてはやむをえないので、三郎左も敵討ちの話をとりさげることになった。

その後、腰元藤は側室吉野の妹だから三郎左の娘にしたらよいということになり、養女にしたうえで右近に嫁入りさせることになった。そのうえで、右近のところに預けてあつた明石梅軒を吉野と右近の妻藤の敵として討たせることにし、すべては丸くおさまつたのである。

やがて、本妻にも吉野にも若君が生まれ、本妻の子は吉野のところで育ち、吉野の子は本妻が育てる、というふうで、以後お家は安泰、万々歳の御代が続いたのであつた。

【校訂本文】

芦の葉の笛、浪の鼓、声すみわたる播磨の浦風、しづかにおさまりて、悪人退治、友仲ふたゝび国主となり、住吉殿の息女を本妻と祝言相済み、のこる所なく、都の首尾もとのひければ、三郎左衛門願ひによつて、太夫吉野を召し出だされ、御手かけとあがめられければ、上十五日は御本妻、下十五日は吉野の花、あかず詠むる殿の栄花、国の掟もそれぐにそなはり、もはや何事も気づかひなしとおもふ折から、三郎左衛門訴状さし上げ、

「吉野のためには兄のかたきなれば、吉野のならばに藤、兄弟の女にかたき討たるべき」

よし、しきりに訴たへけれども、御取り上げなかりしかば、

「しからは自身切腹いたし、吉野どのの心をはらさん」

といへば、是非なくかたき討ちに極りける。

吉野申し上げけるは、

「畢竟、今日かやうに殿様にそひ奉る様になりしも、三郎左衛門殿おかけなれば、何とも今にては刃むかひいたしがたし」

と、段々願ひしかば、加古川右近に、

「よき様にはからへ」

との御意かしまり入り、各とをはじめ、御家古き侍百八拾三人連判して、

「畢竟主君の御ためにころせし事といひ、死にしなにごそ武士のはてともしたれ。さしあたつては、日雇の井戸堀ならずや。君用にて殺したる事にも敵討これある義ならば、一同に御暇くださるべし」

としきつて申しつりける故、三郎左衛門を召され、

「その方所存にて、またく家中のさはぎとなる儀」

と、道理を責めて仰せ渡されければ、三郎左衛門も、これには困り、

「御意、畏り入る。腰元藤はお妾の妹ゆへ、三郎左衛門親分に仰せ付けられ、右近かたへよめ入り相すみければ、右近はまへかど田山より預り置きし明石梅軒をしぼり、御白砂へつれ出で、御代々の高祿をもかへり見ざる大悪人なれば、打首と存するが、吉野殿、私妻藤、兄のかたきの人代にこの者をうたすべし」

と、右近がしりもちして、兄弟の女に梅軒をうたせければ、悪人退治、国家繁昌くめどもつきず、飲めどもかはらぬ御座敷の盃、若殿は御本妻とおてかけと、楽みづくしの枕の夢のおもしろ事に日もかはらず。稚児様二方両方できさせたまひ、御本妻のおてかけの方でそだて、おてかけのは御本妻へとり替えての御そだて、中よしの葉をたれる又あしの葉の入江にかれたつ。讒言なく、知行は十分より肩を越し、お金ほうめく蔵百ヶ所、つかへどわき出る泉福、つきせぬ宿こそ目出たけれ

◆芦の葉の笛浪の鼓、声すみわたるはりまの浦風 「芦の葉の笛を吹き、浪の鼓どうと打ち、声澄みわたる浦風の」「猩々」による。
◆あがめられければ 寵愛したので。大切にしたので。「当流の秘伝には人丸貫之定家卿を、和歌之三尊とあがめ奉る事なり」「戴恩記」
◆上十五日は御本妻下十五日はよし野の花 参考：「さあらは上十五日は上京へゆかふず、下十五日は下京へゆかふまでよ」「狂言・鈍太

郎) ◆死しな 死に際。「しな」は動詞の連用形に下接し、「…のついで」「…のとき」「…の際」などの意を表す。「いきしな、行がけなり」「浪花聞書」「いきしなにつぼうだ花がきしなにはゑじかつたりや桶とぢの花」「咄本・醒睡笑・五」「そして立ちしなには此様に所書キを渡し」「浄瑠璃・日高川入相花王・四」

- ◆さしあたっては その時点では。「我々は急ぎの道、暮に及んで宿屋はなし、差当(サシアタ)って難儀なれば」「浄瑠璃・神靈矢口渡」
- ◆日雇 おもに都市での、自由労務者。日雇い労務者。力仕事や武家方の従者・駕籠昇(かごかき)などの仕事に就いた。日用(ひよう)とも。「幸ひお出入の日雇(ひよう)が女房、夕べ産をいたした」「其磧・禁短気・四・三」
- ◆君用 元来は、主君の用事。「当番其外君用にて罷らざる時は其病危し」「随筆・耳袋」ただし、ここは、主君のために。主人にその必要があつて。
- ◆しきつて 何度も。しきりに。「男は悪しく聞きなし、猶しきつて毎日出で」「其磧・禁短気・一・四」
- ◆道理を責めて 道理をたてにとつて、理屈せめにして。「物にこりたる人の、後よく合点して、道理をせめて云置れし」「西鶴織留・六・二」
- ◆親分 仮親、親がわり。「伯母躰ながらそなたの親分」「近松・心中宵庚申」
- ◆まへかど 以前。「此紋はまへかどに海老蔵が来た時見ました」「秋成・世間猿一・三」
- ◆人代 身代り。この言い方の例は見あたらないが、奉公人が契約の

- 期間中に事故があつたとき、保証人より差し出す代人を「人代(にんだい)」という。ここからの用法か。
- ◆くめともつきずのめどもかはらぬ御座敷の盃 「掬めども尽きず、飲めども変はらぬ、秋の夜のさかづき」「猩々」による。
- ◆枕の夢 「枕の夢の、醒むると思へば」「猩々」による。
- ◆入江にかれたつ 「影も傾く、入り江に枯れ立つ」「猩々」による。
- ◆讒言 他人を悪く言うこと。「ソレハ御比興(ひきやう)畏(こは)くはおまへ讒言(さかしら)に極まりまするがな」「庭鐘・時代三國志」
- ◆十分より肩を越し 充分という以上になる。「肩を越す」はある基準を想定して、その基準を超えること。「余程酒も肩越時分」「其磧・禁短気・五・三」
- ◆お金ほうめく蔵百ヶ所つかへどわき出る泉福 「猩々」に出る「この壺に泉を湛へ、只今返し、与ふるなり」「醒むると思へば、泉は其まま」などを踏まえていよう。
- ◆つきせぬ宿こそ目出たけれ 「尽きせぬ宿こそ、めでたけれ」「猩々」による。

会員の所属一覧

- 木越 治 金沢大学文学部
- 高島 要 石川工業高等専門学校
- 高橋明彦 金沢美術工芸大学
- 村戸弥生 韓国霊山大学
- 木越秀子 北陸古典研究会
- 穴倉玉日 金沢大学大学院社会環境科学研究科